
烙印と光を探す虹

夕霧ありあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烙印と光を探す虹

【Nコード】

N2963I

【作者名】

夕霧ありあ

【あらすじ】

魔法のような力を人に与える、異端の証・烙印。しかし、烙印を持つ人々は少数であり、社会からは疎まれるのが常だった。軍が台頭し、烙印を持つ人がさらに弾圧されるようになった時代。その中で、少女アイリスは烙印によるいじめを受けたことをきっかけに人を信じられないまま、引きこもり生活を続けていた。そんな彼女は軍に捕まってしまうことをきっかけに、烙印を巡る戦いに巻き込まれてしまうこととなる。戸惑い、立ち止まるばかりでいたアイリスが、そこで出会った烙印持ちの現状に疑問を覚える青年、エーベル

とその周囲の人々の力を借りて光を探し、成長していく物語。

登場人物について（ネタバレの可能性あり）（前書き）

※注意

ここは飛ばしても構いません。

年齢は初登場時のものです。

少々初出章のネタバレを含む可能性があります。

章更新とともに増やしていきます。

登場人物について（ネタバレの可能性あり）

（メインキャラクター）

アイリス・ウィルド

初出…プロローグ 性別…女 年齢…16歳 身長…157cm
一人称…私

髪…栗色のセミロング、若干くせ毛気味 目の色…すみれ色 烙印
の力…雪

他者に拒絶されることを恐れ、ひきこもり生活が続いていた少女。
嘗て学校では浮いた存在ではあったが、左手に「烙印」が現れたこ
とが彼女の心を閉ざすきっかけとなってしまう。

そのため人間不信で笑うこともなかったが、実際は感情表現が豊か。
場の雰囲気流されやすく、世間知らずで冗談はつい真に受けてし
まう様子。

自身を取り戻すきっかけとなったエーベルには恩義を感じているも
の、なかなか素直になれないツンデレ。

基本的に慎重でよく考えるタイプではあるが無意識のうちにアクシ
ョンを起こしたりと、意外と行動力はある。

烙印の力は様々な状態の雪や氷を発生させるもの。
趣味かつ特技は家事全般。

エーベル・アルギート

初出…第一章 性別…男 年齢…19歳 身長…177cm 一人
称…俺

髪…肩にかかるほどのぼさぼさの赤毛 目の色…琥珀色 烙印の力…
光

「烙印」を忌む世界に疑問を感じ、行動を続けている青年。

アイリスと対照的に前向きで自信家だが、口が悪い。彼女同様に若

干ひねくれている面も。

強引とも無謀とも言える行動をとることもあるが、その奥にあるのは他者を想うことであり、仲間を守り抜く覚悟を持っている。

幼い頃に苦勞したためか、生命力は高い。また、運の良さも持ち合わせている様子。

烙印の力は大小の光の粒子を放つもので、彼の意味に従って動く。

セリシア・アルギート

初出…第二章 性別…女 年齢…17歳 身長…164cm 一人称…あたし

髪…腰にかかるほどの長さの赤毛の、ポニーテール 目の色…琥珀色
エーベルの妹。外見は彼とそっくり。

村の自警団の一員で、体術が得意。兄同様に大胆でさばさばした性格。

烙印の力こそ持たないが、エーベルを陰でサポートしている。

男勝りで言葉使いも女らしくなく、キツイことを言うこともあるが基本的にはお人好しのお節介。

年頃の女子らしく恋愛沙汰には興味があるようだが、自分自身のそれにおいては非常に鈍い。

ロゼット・ロディエリア

初出…第三章 性別…女 年齢…25歳 身長…152cm 一人称…私

髪…ウェーブのある赤紫の髪をひとまとめにしている 目の色…深緑 烙印の力…草木

情報屋のお姉さん。独自のルートで烙印や軍の調査をしていた。

スタイルはいいが、背が低いのがコンプレックスで上げ底ヒールを愛用している。

自分にも他人にも厳しいが、決して固い人物ではなく冗談や噂話が大好き。口が達者でよく仲間をからかっている。

烙印の力はどこからか草木を生やして操るもの。コントロールは良くないとか。

趣味かつ特技は男（特に年下）を手玉に取ること。

フィルツ・ジェノン

初出…第四章 性別…男 年齢…19歳 身長…167cm 一人称…僕

髪…ブロンド、サラサラの短髪 目の色…青 烙印の力…テレパシー 理知的な雰囲気青年。ナージュ村の医師見習い。

生真面目だが口うるさく頑固な面も。

キレると口調が敬語になる。

セリシアのことが好きだが、本人はまるで気づいていない。

烙印の力は、ある程度近い場所で念じた人物に声を伝えるもの。

アイン・グランデ

初出…第四章 性別…男 年齢…37歳 身長…183cm 一人称…俺

髪…黒髪、オールバック 目の色…焦げ茶 烙印の力…重力 エーベル、セリシアの保護者的存在。独身。

彼もまたナージュ村自警団の一員。

いかついように見えるが良識ある大人で、判断力に優れている。

メインキャラクターの中ではリーダー的な存在。

烙印の力は任意の場所の重力を操るもので、念力のように使うことも出来る。

（サブキャラクター）

ソニン

初出…第二章 性別…女 年齢…87歳 烙印の力…癒し

ナージュ村の村長で、村一番の長老。幅広い良識を持っており、烙印持ちを村に積極的に受け入れている。

年老いているもののまだまだ現役で、村の人々のことを常に考えている。

烙印の力は傷を癒すものではなく、気持ちを支えるもの。

シェリー

初出…第三章 性別…女 年齢…36歳

宿屋の女将。気さくな性格でアイリスに宿屋で働くいろはを教えている。

ジーオ

初出…第三章 性別…男 年齢…11歳 烙印の力…鍵掛け

シェリーとアレスの息子。親に似て快活な少年で、エーベルに憧れている。

まだ子供のため世界中を旅できないことを残念に思っている。

アレス

初出…第三章 性別…男 年齢…39歳

宿屋の主人で、シェリーの夫。恰幅がよく威勢がいい。

気が合うのか、アインとは昔からの親友だとか。

クレイク

初出…第五章 性別…男 年齢…28歳

密かに烙印について研究している学者。

ロゼット、エーベルと面識がある。

物腰は柔らかいが、学者らしく頭の回転は速い。

シエラ

初出…第五章 性別…女 年齢…26歳 烙印の力…風

クレイクの妻であり、ロゼットの友人の穏やかな女性。
烙印持ちではあるものの、その力は微弱たるもの。

氷の心の少女

——こんな後ろ向きでなければ、こんな烙印なんて持ってなければ、私の現状は変わっていたの？——

手の甲に「烙印」があるのを見つけてから今現在まで。アイリスはその烙印の存在を恨まなかったことはなかった。

それもその通りのことだった。烙印は、アイリスを現状に追いやった原因であるのだから。

アイリスの心は凍りついたままで、まるで長い極夜の冬を過ごすかのようなだった。そしてそれは、きつと永久に続いてゆくようにも見えていた。氷を溶かし、日が昇り始める春はやってくる訳もなく、ただ、ひたすらに冷たさと光が当たらない暗闇に耐えるだけ。

「ねえアイリス、家の中にずっといて、退屈じゃないの？　なんなら私が話し相手になってあげる」

「……いいよ。一人にさせて欲しいの」

アイリスの妹のフリージアは彼女を気遣って、話をしようと努力していたものの、大抵は冷たく突き放されていた。

アイリス自身も、妹の悲しそうな顔を見てると少しばかり相手にした方がよかったかな、といつも自分の態度を悔やんでいるのだが、気分が悪いときには突き放すことしか出来ない自分を恨むことしか出来なかった。

だが、たまに気分がいい時に家族と話をすることで、とりあえずは長い引きこもり生活をしていながらも人として生きることができていたのだった。

何かが変わるのを恐れ、ただ部屋に引きこもった日常。それが、弱く、ちっぽけなアイリスにとってただ一つ耐えられる生活であったのだ。

光を探すために、もっと寒く冷たい場所に出ることを恐れて——。

三年前に遡る。

アイリスが中等学校に進学してそう月日は経っていない頃だ。

この国の義務教育は初等学校の六年間だけではあるものの、教育熱心な親の薦めもあってアイリスはなんとなく中等学校に進むことにした。

初等学校との違いに戸惑いながらも、アイリスはとりあえずの所普通に、それなりに幸せに学校生活を送ってこれていた。

そんなある日の放課後のこと、当番の掃除を終えて帰ろうとした時のことだった。そのことと後に続くことは、アイリスが詳しいことを思い出したくもないことだ。

クラスメイト達が、笑いながら話している声が聞こえる。

その内容は誰かの悪口のようなだった。そして、誰のことを指しているのかは鈍いアイリスでもすぐに分かってしまった。

アイリスに盗み聞きの趣味はないが、思わず耳を傾けてしまっていた。

それにクラスメイトたちが気づくと、彼女たちは一度こちらを睨んだ後、互いに仲良しな様子を見せつけながらばつが悪そうに去っていくのであった。

立ち聞きは確かに悪いことだとは思うが、他に自分は特に悪いことをした覚えもないし、どちらかといえば大人しくしていた方だ。

今までの楽しかった日々は、嘘だったの？ 彼女たちは、表面だけを繕っていただけなの？

今にも湧き出そうとする涙を必死にこらえて、アイリスは学校を後にした。

とにかく一刻も早く家にたどり着こうと、周りのもの全てを気にせずに、力の限りに走る。しかし、体力のないアイリスはすぐに疲れてしまい、道中でへたり込みそうになった。

その時に、ふと自分の手の甲に目が入ってしまった。

アイリスの左手には、噂に聞く「烙印」そのものが、浮かび上がっていたのだ――！

その印は怪我をした時には痣として付きそうもない。それに、手の甲を怪我した覚えもまるでない。

（どうしよう。私、みんなにいい思いされてないこと知ったのに、さらに嫌われちゃう）

アイリスが聞いた「烙印」の噂は次のようなものだった。

烙印を持つ人は、魔法のような力を使うことができ、それが災いとなりえる。誰にだって現れる可能性があって、いつ現れるかも分からない。烙印は忌むべき存在なのだから、この世にあってはならない――。

あくまで根拠も何もない作り話のようなものであったのだが、アイリスは昔、手の烙印によって社会の外へとはじき出された人を見たことがあったために、この突然突きつけられた事実に冷静さを失いかけていた。焦りを覚え始めていたアイリスから、さらに望みが奪われる。

烙印を持っていれば、誰であっても嫌われて除け者のされるのだろうと少女の心には何の疑問の余地もなく刷り込まれていた。それが故に、アイリスの光を失うには十分すぎるくらいの印であったのだ。

明くる日も、その次の日も、アイリスは烙印の存在をひた隠しにしながら学校に行き続けた。けれども、烙印が見つかるのはそう遅くない。あつという間に噂は広がり、誰もがアイリスの存在を認めないような扱いをした。

ただでさえアイリスは周りとの距離を感じていたが、その距離がさらに広がって、何もない場所にただ一人でぽつんというような感覚になっていった。

もう、この場所に居ることが耐えきれないようにアイリスは薄々感じ始めている。

（学校は行きたくない。だけど、学校に行かないとすれば？）

そんな考えが心の中にくっきりと浮かび上がる。

（誰も分かってくれないとしたら、きっとそれが私を失わずに済む方法なんだ――）

それから三年、アイリスは家に引きこもり続けた。

流石に何もしないのは暇であるので、家事をしたり、自分の好きな勉強をしたり、本を読んだりしてアイリスは暇を潰していた。

寂しいという感情は、とっくの昔に慣れっこだった。

家族や妹も、もうどうでもよくなったのか、氣を使ってくれていない。それよりも、人に拒絶されることの方が恐ろしかった。

人に近づく、この手の烙印のように相手に忌まれ、烙印の力のように傷をつけてしまいうだからだ。

烙印を持つ人々は少なからず、普通の人には使えない自然現象に逆らう力を使うことができたのだったが、それもまた、彼らが恐怖の対象となる一因となっていた。

アイリスの烙印の力は、周りの気温を下げて氷や雪を作り上げるもの。誰もいない時にこの力をこっそりと使ってみたこともあったが、使い方を誤るとこの冷たさはどこにでも広がっていきそうな気がした。だから、それが怖くて殆ど力を使うことはなかったのだ。

けれど、何を思ったのか、今はこの力を使ってみたい気になっている。

アイリスは部屋の花瓶にあった花を取り出すと、それを烙印の力によって凍らせてみた。

それは、自分の心の有様の証明でもあったのだ。

（こうすれば、この花は形を残したままになるけれども、この花の時は止まったままになるのね……）

夕暮れの中。栗色の、くせ毛気味の髪を持つ少女は一人で佇む。そして光がみられない、しかし深い紫の瞳で、この凍りついた一輪の花を日が落ちるまで見つめ続けていたのだった。

1. はじまりは烙印から

「じゃ、行ってくるね。アイリス」

アイリスの母は、家にいる娘に声をかけた。

「……行つてらっしゃい」

気の抜けた返事で返すアイリス。これが朝のいつものやりとりだ。扉がパタンと音をたてて、母親は仕事へと出かけていった。そして、家にはアイリスひとりになる。父親も仕事に出て、妹も学校に行っているからだ。

（お母さんは、きつと仕事が好きなんだよね。……私が引きこもるようになってからは、私が家事をするのをいいことに本格的に働くようになったし、ね）

しかしながら、アイリスはもう寂しいとは思っていなかった。一人でいることに慣れすぎて、寧ろ自分が一人でいる方が当たり前になってしまっていたからだ。誰にも煩わされないでいられる事の方が、アイリスにとっては大切だった。

いつものように、アイリスは今日の日課へと取りかかろうとする。皿洗いに、掃除に、洗濯。要するに、家事全般だ。

アイリスが引きこもり生活を続けていられるのも、ひとえに家事の殆どをアイリスが担当しているからだ。

初めのころは両親妹もとやかく言っていたが、流石に三年も経つとこういうものかと彼女のことを放っておくようになった。

まずは、皿洗いに取り組む。

皿を流す最中、この三年でだいぶスキルが上がったなと感じられた。そりゃずっとやっていれば当然のことなのだが。

食器を適当に重ねてから、アイリスは居間のソファに一息つく。まだやるべきことが終わった訳ではないが、残りは少し間を開けてからにしよう。

少し本でも読もうかな、とも考えたが、いつもはどこかに片づいてる筈の新聞があることに気づいた。

日付は、今日のもの。

これを読んだらまた続きをするのに丁度いい、とアイリスは手にとった。

けれども、書いてあるのはいつもと同じような内容。最近、この国では軍部が台頭しているせいか、彼らにとって都合のいいことしかない。とりわけ、大きなニュースがあった訳でもなさそうだった。だが、アイリスは内面の下に書いてあった広告に手が止まってしまった。

『我々は、烙印を持つ者を探しています。この烙印を持った魔族は、近いうちに国を滅ぼすでしょう。見つけ次第、我々に連絡をお願いします。謝礼はこちらで用意します』

との文とともに、アイリスが持つ烙印とまるで同じような人を集団で押さえつけている風刺画が描かれていた。しかも、烙印持ちを連れていけば、謝礼金があるらしい。

この広告は、烙印を持ってなくても不快に思う人は少なくないようなものだった。

しかし、新聞社も軍に逆らえなくなってきたのだろう。そうでなければこんな広告、誰だって載せたがらない。

アイリスは固まったままであった。

突然家の扉のベルが鳴る。アイリスは我に返ることができたものの、嫌な予感が消え去っていなかった。

居留守ということにしておこうと、アイリスは考えた。

けれども、向こうは引き下がる気配はなさそうであった。

「そこのお前、扉を開けろ。さもないと、我々が扉を壊す」

男の声が脅迫する。

はっとして窓を見ると、カーテンはかかっていない。ガラス越しに自分の姿はちゃんと見えていたようだった。アイリスは自分の迂

闇さに心がちくりとした。

扉を壊されては困るので、怯えつつも扉を開ける。

立っていたのは、男二人、女一人の軍服を着た集まり。

「これは調査よ。……あなた、烙印を持っているか私達に見せなさい」

恐怖に声も出ない。ただ立ち尽くすことしか出来ないアイリスの右手を、男の一人が引っ張った。

「こいつ、烙印持ってますよ」 彼はもう一人の男にそう伝えた。「でかした」

その上官と思われるもう一人の男はというと冷静さを崩していない。落ち着きがなさそうない。

「じゃあ、連れて行きます？ ちょっと、この子を押さえるの手伝ってくださいな」

「承知」

女はアイリスの左腕を押さえる。アイリスの右手を引っ張った方の男も便乗する。

「どうして、烙印を持ってるってだけで皆は！」

アイリスは震え、涙を流しながらも必死に声を張り上げ、抜け出そうとはしたものの、彼女は非力であった。彼女が非力でなくとも、二人がかりで押さえつけているために全く持って抵抗は意味をなさないだろう。

「あなたたち魔族は、私達にとって邪魔な存在。それだけのこと」

「ここで烙印を使ってみろ。そうしたら、この弾が飛ぶからな」

上官は無機質な、見るからに重そうな銃を突きつけた。

烙印の力を使うことも出来ない。このまま、私はどこかに連れて行かれて、そしてそこで死ぬのだろうか――？

アイリスの脳裏にふとそんな考えがよぎった。

何て意味のない命だったんだろう。烙印なんて持っていて、引きこもることしかできなくて、あっさりと軍に捕まって。

確か、学校に行かなくなった時にお父さんにこっぴどく叱られた

つけ。そんなずいぶんと前のことを思い出した。

アイリスの心の中には、絶望と後悔しか残っていなかったのだった。

2. 壁の向こうの声

この場所に閉じ込められてから、どれだけの時が流れただろうか。暗く、僅かに火が灯されているだけの牢屋では、それすらも分からない。勿論、牢の中には何かある訳でもないために、アイリスは暇を持て余すことしか出来ずにいた。

交代の時を除いて、石像のように微動だにしない軍人の目線が痛い。

配給される食事はとりあえず生きていく上の最低限、といった所で、お腹も空いていた。

気のせいか、アイリスの栗色の髪は少しかだけ艶を失っているように見えた。

（私はもう、ここで死んでしまうしかないのかな）

考えは悪い方向に向かっていくばかりだ。アイリスはひきこもり生活をしてからただでさえ暗かったのに、自分がさらに陰気になっていたのを感じた。

しかし、明るいことを考えたとしても何があるのだろう。

どうせ結末は決まりきったことではないか。光なんて、ここには差し込まないに決まってる。

（けれども、私を牢屋に入れておくままにしておく理由だけは分からない）

アイリスが疑問に思っていたのは、ただその事だけであった。

考えるにしても疲れ、アイリスは目を閉じて何も考えないことにした。

牢の中は薄暗く、昼か夜かも解らないような状態であったから、時間感覚なんてずいぶん前に狂ってしまっているだろう。

しかし、瞳を閉じてみても思いは湧き出てくるばかりだ。何も考えないようにしようと努めるのも悪あがきだった。

いっそのまま眠れたならばその間この状況から抜け出すこともできるだろう。しかし、心は眠りにつくことさえも許さなかった。同じように考え事の循環をしていく中で、時間だけがいたずらに過ぎていく。

「おい、誰かいるか？」

どこからか、人を探すようなささやき声が聞こえる。

終わりの見えない今に、変化がもたらされたような気がした。

少し低い男の声のようであったが、誰かまでは解らない。軍の人が刑を執行しに来たのかも、とアイリスははっと鉄格子から廊下を直視する。しかし交代の時間なのであろうか、いつも見張っていた筈の軍人は見えず、目の前の牢もがら空きのままだ。

だったら、一体どこから？

アイリスはとりあえず、牢の壁の方に耳を傾けてみた。

声が、また聞こえる。

「誰かいたら、返事をしてくれ」

アイリスは無視しようかとも思った。

何だか怪しいし、この牢の中で自分に話をしてもらうにもならないだろうし、話をしたいと思えない。

けれど、返事くらいは返そうよ、と心の声が聞こえてきた。

「いますけど」

心の声には従ってみたものの、アイリスは上手く言葉に出来ずに無愛想な口振りになる。

「よかった。俺の他にも、烙印で捕まった人はいたんだな」

どうやら、声の主は烙印を持ち、アイリスと同じように牢に入れられた人物らしい。

彼はこの壁を挟んだ、向こうにいるようだ。

「そりゃお前も、烙印持ちだよな」

青年はアイリスに念を押す。

「そう……ね」

「なら、話は早い」

彼は何がしたいのだろうか。

単に、話し相手が欲しいだけ？ それともまさか、脱獄とかね……。とアイリスは思った。だが彼の考えはそのまさかであったのだった。

「俺の脱獄に、協力してほしい」

アイリスも、初めの頃は脱獄を考えたものだった。しかし、自分には出来ないし方法もないし勇気もないと、すぐに諦めてしまったのだ。

脱獄が上手くいけるのならば、誘いに乗った方が自分のためだと思う。反対に、この人は私を利用するのではないのだろうか、と疑いの気持ちも持ってしまう。

ジレンマを抱えるなか、アイリスは不意に言葉を漏らしてしまった。

「脱獄、するんだったらあんた一人でも出来るじゃない。もしも出来るなら、の話だけど」

言ってあしまった、思うには遅かった。

しかし青年の方は若干黙ったものの、まるで変わらない口振りでまた話し始める。

「お前、ひょっとして俺を試しているのか？」

「えっ、わ、私はそんな訳じゃなくて……！」

向こうには伝わることは決してないであろうが、アイリスはぶんと首を振った。

違う。疑いの本心をそのまま彼にぶつけてしまっただけ。けれども、その言葉は挑発とも取れる挑戦的な口調だった。

「やれるもんなら、やってみる。できたものなら、お前も生きられ

る。そうだろう？」

青年は乗り気の様子だ。

「そんな勇氣はないし、第一外に出たとしても、私はどうすればいいの？ あてにできる所なんて、ないんだもの」

「そういった場所なら、心あたりはある。それに、こんな所で野垂れ死ぬよりは、険しい崖を這い上がっても生きてるほうがいいに決まってる。だから、この件については考えておけよ。……そろっ
と見張りはまた来るからな」

それだけ言ったきり、彼はまるっきり話さなくなった。

見張りはじきに戻って、何事もなかったかのようにまた静寂が始まった。

あの人は烙印で時間が分かるのだろうか、と疑問を感じる。

彼は、この軍人がいなくなる一瞬の隙を分かっていた。

その時間が、ほんの僅かな間であるということも。

とにかく、信用できるかどうかは分からないが無駄に前向きで、行動的で、自分よりも断然凄い人物だとは思えた。

青年の言うとおり、アイリスは少し脱獄のことを考えてみる。

両親や妹はさぞかし心配しているだろう。だけど帰りたくないし、帰ったら彼らにも被害が及ぶかもしれない。それだけは避けておきたい。

だから、脱獄しても事態は大して変わらないじゃないか。それに、また捕まる可能性も高い。

確かあの青年は当てにできる場所があると言っていた。そこにお世話になるの？

私は生きてて一体何ができる？

アイリスは自分自身に問いかけてみた。

立ち止まって考えたままでも、事態は一向に進まない。

……とにかく、前進しなくちゃ。今の私がいるのは、まるで前に

進まずに立ち止まっていたからだ。一体、何から始められるだろう？
不本意ながら、さっきの青年から前向きさを分けてもらえたよう
な気がした。

私は彼を信じられるの？ ……同じように、烙印を持っているの
だから、そりゃ信じてみたい。

また話せる機会があるのなら、伝えてみよう。こんな私で良けれ
ば脱獄に協力する、と。

2. 壁の向こうの声（後書き）

3. 脱獄

アイリスはうつすらとまぶたを開く。

どうやら、知らない間に眠りに落ちていたようだ。牢の中にいた時で、これほど深く眠りにつけたことはない。眠ろうと思ってもなかなか眠れずに、ただ目を閉じているだけということもよくある事であった。

どこか安心してしまった所があるのだろうか。まだ生きていられる見込みがあったからであろうか。アイリスは牢屋の無機質な壁にもたれて、そっと穏やかな表情を浮かべた。

彼女はそういえば壁の向こうにいるあの人はどうしたのだろうと、ふと思い出す。

彼にできるものなら脱獄に協力したいと、伝えたかった。けれども、檻の外で軍人は人形のようにアイリスを見張っている。そのため、話をすることも出来ずにいる。

だったら、昨日の事は夢や奇跡みたいなものだったのだろうか？

アイリスは、ちらりちらりと軍人の様子を疑う。

そうしている間にどれだけの時間が経ったかは分からないが、軍人が少しだけ目を離している時間があつた。その隙に、アイリスは牢の奥の壁に向かい、壁をコツンと叩いた。

声に出したら、ばれることは間違いない。だから、それはアイリスに出来るただ一つの、壁の向こうの人物にメッセージを伝える手段だったのだ。

しばらく経っても返事は来ない。もしかして気づいていないのかも、とアイリスは考えた。

見張りなんて気にしていられずに、壁をもう一度叩く。

一度目よりも強く叩いたせいにか、アイリスの手は僅かに赤くなつた。

（これでずっと返事が来なかったら、私は何を言えがいいのだろうか）

アイリスは来るとも分からない返事をひたすら待つ。一秒ですらこの閉鎖空間に居ることを長く感じる中、たん、と誰かが駆ける足音が響いた。

静寂だった牢屋が一瞬にして騒がしくなった。

「脱獄だ！ 囚人が逃げたぞ！」

アイリスを見張っていた軍人は緊迫感を持ち始める。

「……今にも処刑しようとしていた筈なのに！？ 僅かな隙に付け込むなど恐ろしや恐ろしや！」

「とりあえず追え！ 無理矢理でも処刑台に連れ込め！！」

口の軽そうな軍人が冷静さを無くして叫んでいる。よくもまあ今まで軍の中でやってこれたなあとアイリスは感じたが、そのお陰で状況が分かったのもそれは運がよかったと思う。

でも、処刑という言葉には、心がゆさぶられる。自分が壁の向こうにいた彼よりも先に処刑台に連れられていたらと思うと、ぞっとした。

（まさか、本当に実行してしまうなんて）

落ち着こうとして牢屋の壁にぺたりと手をつけたまましていると、狙ったように光がアイリスの扉の鍵へと飛び込んで、鍵だけが灰となくなっていった。

アイリスはその様子を見ると、驚きのあまり動けないままだった。けれども、すぐに実行者の青年はアイリスの前に顔を表す。

アイリスが初めてその姿を見た青年は、アイリスより二、三歳年上に見えた。

肩にかかるよりも少しだけ長い赤い髪は、山火事が起きたかのようにはさばさで伸び放題になっている。生意気そうな雰囲気ではあったが、目に少しだけかかる長い前髪から覗いた顔は比較的整った顔立ちをしていた。

「おしゃべりは後だ。とりあえずここを抜けるぜ！」

青年はアイリスの手首を掴む。アイリスは彼のなすがままにされて牢獄の廊下を走らされていった。

軍人達は勿論見逃す訳はなく、ひたすら彼らを追いかけていく。中には手に持つナイフを投げる者もいたが、青年はひらりと慣れた様子でそれらをかわし、烙印の力によって強い光を放ち、軍人達の目をくらませていった。

「ちょっと派手にやってやるから、俺の右手の方見んじゃねえぞ」
その光は太陽の光を直に見たような輝きであり、彼の右手から目をそらしていてもその眩しさはアイリスに伝わってきた。

幸い、彼の尽力のお陰でアイリス達に怪我はないが、尽くしてもいっこうに軍人の数は減りそうにない。むしろ、数も増えている。無傷で通り過ぎるのは難しそうだ。

アイリスは、何か自分に出来ることはないかと考える。

（私の烙印の力で、何か彼の助けにならないだろうか）

思いを頭で巡らせると、ひとつのアイデアへと辿り着いた。
それを具現化できれば、一か八かで切り抜けられるかもしれない。
アイリスから迷いは消えていた。

そう、後戻りは出来ないのだから。

アイリスは烙印に思いを託して、降り続ける雪のイメージを思い描いた。

すると、屋内だというのに粉雪が舞い始め、粉雪はしだいに強く降り積もってゆく。

「な、何が起こっているのだ!？」

「その小娘の烙印の力を止めろ！」

「ですが、どうやって!」

「力ずくだ!」

軍人達は言い争っている。

「もたもたするな、そこだ!」

その時、アイリスの足を何かがかすった。そして聞こえる、無機

質な金属音。

必死に走っている所為で気づいたのは遅かった。けれど、感じたのは痛み。

アイリスが目の中の床に目をやると、投げナイフが落ちていた。でも走るのに必死で、いちいちかすり傷なんて気にしていられない。それに、烙印の力はもう発動してある。

そう、アイリスの狙いは燃えやすい粉雪を想像しそれらを散らせて、青年に粉雪ごとあたりを燃やすことにあった。

「術をお願い！」

「雪に光だと？ ……お前が何がしたいのかは解らねえが、いっちょやってみるか！」

光は粉雪を燃やし、輝きを増す。

そして、次々と光は広がる。

「やるじゃねえか」

「あ、ありがと」

大技を披露したからであろう、アイリス達を追いかける軍人の数は少なくなっていた。

それでもひたすら、無我夢中で走り続ける。

「疲れてないか？」

青年はアイリスを気遣う。

「そりゃ、疲れたよ。でも、大丈夫。逃げるまでは大丈夫だから」

「そうか、なら良かった」

「もしかしてあそこが出口なの？」

「多分、な」

アイリスは目線を前にやった。目の前にあったのは、光が差す扉。アイリスは扉に触れてみた。

「おい、ちょっと待て。罠とか疑えよ」

しかし、アイリスの様子にはこれと言った変化はない。

「……大丈夫そうよ？」

「なら、行ってやるぜ」

二人は扉の外へと駆け出していった。

だが、牢獄の中を抜けたとしてもまだ完全に軍の基地を抜けた訳ではない。まだしつこく追いかける軍人もいる。

一瞬の判断によって、抜けられそうな所を探す。

だが辺りを見渡しても、一面が生け垣で覆われている。そんな所なんて、何処にあらうか。

「やべっ……」

軍人の足音が聞こえてきた。

青年はアイリスを抱えるようにして、とっさに生け垣の中へ飛び込む。

「はあ……。いっ、痛ったあ……」

やっと一息ついたものの、アイリスは息が切れていた。むしろ、体力のないアイリスにとってはずっと走りつづけていられたことの方が不思議でならなかった。きっと、火事場の馬鹿力とか、そういった類いのものが働いたのだろう。

「しっ」

青年はアイリスをたしなめた。

近くで密着している姿勢のせいか、彼の呼吸の音が聞こえてくる。軽く息は乱れているものの、そこまで疲れてない様子だった。

「それから、どうするつもりなの？」

「だから黙ってろ。……どこかに抜け道がある筈だ。ついてこい」

青年はアイリスを解放すると、草の中をほふく前進で音をたてないようにそっと進んでゆく。アイリスも、慎重に彼についていった。「……あった。ここに、裏口がある」

生け垣が鬱蒼と茂っていて、初めのうちはアイリスに見えていなかった。そして、裏口はしばらく使われていない様子である。

裏口には鍵がかかっていたが、どこで拾ったのであろうか、青年はコートのポケットから針金を取り出し、器用な手つきでこじ開けた。古いものであったのだろう、鍵はすぐに開いた。

外の様子を見ると、収容所は、どうやら町の外れの、森や林に近

い所にあつたようだった。周りには、山々も見える。

連行された時には分からなかったけれども、収容所の殺伐とした雰囲気とは裏腹に外には花が何輪か咲いていた。

それらは、情けのない世界に抗う抵抗者のようにも見えた。

少しだけ歩いて林の中に入ると、木々に隠されて軍の収容所はもう見えなくなっていた。

とりあえずは、生きて外に出てこれたことになる。

「外の日差しをちょっと見なかったただけでも何だか違う、そう思わねえか？」

青年はうんと伸びをして、アイリスに笑顔を向ける。

あまり面と向かってなかったので、アイリスは一瞬肩を上げる。よく見ると、所々かすり傷や切り傷があつたりして、無傷とはいえない状態だった。けれども、そんなものを無視して笑っていられる彼には笑顔が似合っている。悔しい思いながらも、アイリスはそのことを認めざるを得なかった。

「その気持ち、私にはよく解らない。私は日の光を浴びたの、しばらくぶりなのよ……」

アイリスは口を尖らせ、青年と目を合わせないように目を伏せた。「しばらく？」

青年は何か引っかかるものがあつたのか、確かめるようにアイリスに聞く。

「……そう。外出るの、嫌いな。烙印、いつばれるかも分からないし……」

「そうか。……なるほど、な。そういえば、あたふたしていたしお前の名前、聞いてなかったよな。ずっとお前でもアレだろうし」

アイリスは少しの間、青年に背を向けたまま黙った。そして再び口を開く。

「アイリス。アイリス・ウィルド」

「アイリスか。いい名前だ。名乗ってもらったからには、俺も名乗

らねえとな。エーベル・アルギートだ」

「そう」

「あっ、そうそう。アイリス、これからどうするつもりなんだ？」

「……私、ここがどこかもわからないし、どこに行けばいいかも分からない」

俯いて、首を振る。アイリスはエーベルに顔を見せまいとした。

「とりあえず、生きたいってんならついてこいよ」

「えっ!？」

アイリスは顔を上げたが、エーベルの突拍子のない発言に驚くことしか出来なかった。

「俺は俺の村に帰るつもりだけど、この村、訳ありな人間が多いからな。ちゃんと働けば、烙印持ちでも保護されるし衣食住も確保はできる」

「そういうことね。……でも、本当に？ 迷惑じゃない？」

「別にひとりぐらい増えたって、大したことはねえよ」

「じゃあ、道案内……お願いします」

まだためらいがあるものの、アイリスは素直にエーベルに頼む。

「了解だ。……だが、烙印を持っている以上、今後のことは甘く見るんじゃねえよ。特に、お前みたいな能力の持ち主は」

「え?」

エーベルの発言にいまいちピンとこなかったアイリスは、一瞬だけ彼の表情が厳しいものになったのを見逃していた。

「何でもねえよ。でも、いずれはまた物騒になるかもしれないから気をつけろってことだ。また後で話をさせてくれ」

エーベルは何事もなかったように元の調子になって、林の奥へと進んでいった。

「は、はい」

アイリスも、置いていかれないようについていく。

「そんなに急ぐ必要もねえだろ。体力ないんだったらゆっくり行つてやるからさ。……じゃ、しばらくの間よろしくな」

「よろしく……」

二人は一歩一歩、歩みを進めて行く。

こうしてアイリスは、家の中ではない、外の世界を見ていくことになったのであった。

この奇妙な出会いが後にアイリスの、そして烙印をもった人々の人生を変えて行くことになるなど、アイリスは知る由もなかった。

1. 光は弱々しく散らばってゆく

アイリスとエーベルは軍が運営する烙印所持者を収容する牢獄を抜け、次の目的地へ向かった。

その地のことについて、エーベルは「誰かに聞かれたら困るからな」と詳細を話していないために、アイリスが本当に彼が『安全な場所』へと案内しているのかどうかを知る由もない。けれども、ここからだ歩いて数日間かかる距離らしい、ということだけは聞かされていた。

アイリスはまだエーベルに関して疑いの余地は残しているものの、同じ烙印持ちであるということだけを信じて、彼についていくことにした。

軍の警備が厳しそうな表の道を堂々と歩く訳にもいかなかったためか、アイリスはエーベルの後に続くような形で人通りのない獣道を歩いていった。

緑が鬱蒼と生い茂りあたりは森を成している。見えるのは変わり映えのしない、木がどこまでも続く光景ばかり。

土地感覚のない人であれば、道に迷うことは間違いないだろう。それでも、エーベルはこの道を何度も通ったことがあるらしく、迷いなく進んでいった。

「おい、ついてきてるか……って、そんなに離れてどうするんだよ」先を進んでいたエーベルが突如振り返った。

アイリスが数メートルか、それ以上の距離をおいていたこともすぐに見破られてしまった。

「だ、だって……」

アイリスが離れて歩いているのは、ただ単にエーベルの足並みの早さについていけないだけだった。それに、少し前に会ったばかりの人物であるエーベルと行動を共にしていることが落ち着かない

といったこともある。

けれども、それを言うのもばかばかしく、彼女は言葉を濁した。

「はぐれても知らねえぞ」

「それは、私が困る！」

「……だったら俺が面倒だから、あまり距離おくな」

エーベルはそれだけ言うと、またアイリスに背中を向けてつかつかと歩き出した。

アイリスはそんなエーベルに追いつくだけでもやっただ。

とてもじゃないけどついて行けないと言わなきゃいけないか、もやもやとした気分が膨張して、彼女は思わず叫んでいた。

「……そんなに早く歩かれちゃついていけないの！」

ぴたりと足を止めて、啞然とした顔でエーベルはアイリスを見た。アイリスは我に返ると、そんなに大きな声だったのかと恥ずかしく思った。

「……それは、悪かったな。一人でいるときの癖が、つい出ちまっ
たみたいだ」

「分かってるんだったらいいけど」

「じゃ、氣いつけてみるよ」

「今は俺達脱走囚だしな、少しぐらいは不安だと思うぜ？」

「全然、不安には見えないけど……」

「やっぱり、そう見えるか」

アイリスが見たエーベルは、常に強気で、不安など抱えていなさそうに見えた。だから、彼の嘲るような調子は、意外なものだった。
「不安？」

「ああ、そうだとも。烙印所持者は、俺はずっとこんな状況に置かれるのか、とかな」

「そうなの？」

「そんなん、考えたくないから忘れたふりでもしてるんだ」

アイリスはそつとエーベルの横顔を覗くと、彼の顔には微笑が浮かんでいるのが見えた。

逆境の中でも笑顔を浮かべられるエーベルに、アイリスは疑問だった。

「どうして、不安でもそんな風に笑っていられるの？ 私には、分らないよ」

無意識のうちに言葉が出る。

それはエーベルに聞いてみたいことでもあったのだが、あっさりと言葉に出せるとは思ってもいなかった。

「ん……。そうだな。笑っていればどんな状況も乗り切れることが出来る。そんな気がするだけだ」

「ずいぶんと気楽な考え方なのね」

アイリスの目から見れば、前向きさも皮肉に見えてしまうようになっていた。

「ほら、楽観的にならなかつたら俺、今頃ペしゃんこに潰れてるかな」

エーベルはアイリスの皮肉を皮肉で返した。

「ふうん……。私、烙印を見てからは、この世界に楽しいことなんて何一つないと思ってたから。だから、自分から探しても無駄だと思ってた」

「自分で探してみれば、意外と見つかるもんだぜ」

エーベルは続ける。

「例えば、真っ暗な所に閉じこめられたでしょう。勿論何も見えなくて、出口もどこにあるかも分からない」

「へ？」

「ただのたとえ話さ。そんな状況に置かれたら、アイリスは、どうするんだ？」

「涙が枯れるまでずっと泣いてると思う……」

実際、牢屋に入れられて初めの方は泣きっぱなしなのであったのだ

が、泣き疲れ、涙が出なくなると何も考えないようにしていた。エーベルが牢屋に入れられたのはその少し後だったようなので、アイリスの当初の様子を知るよしもなかった。

「涙が枯れたら？」

「怖いけど、頑張って周りを手探りで探してみるかもしれない」

「……そうだな。そうすれば、偶然出口を見つけられたりするかもしれないし、日の光にもう一度当たることもできる。その差しこむ光を探そうとしない限りは、何も楽しくなくなってしまう」

エーベルがきっぱりと言い放つ。それは、何らかの意思を持ったようなものであった。

「なるほどね……」

脱獄の件も、こんな考えだったのかとアイリスは感慨にふける。

「まあ、要するに、光を見失うなっこと。俺が言いたいのは、たとえ光を見失っても、光を探し続けろっことだ」

「光を、探す？」

半信半疑で、アイリスは繰り返す。

「そうだ」

「私も光を、見つけられるの？」

「ああ。探そうとすればきっと、見つかる筈だ」

それだけ言い残して、その後、エーベルは何も言わなかった。自分なりにその先を考えろ、と彼は暗に示た。

すぐに実行できる訳ではなさそうだけれども、アイリスは最悪の事態ばかりを考えるのは意識的に出来る所から止めてみようかな、と思った。

（そういえば、昔から最悪の事態ばかりに捕らわれていたかもしれない）

「……さっきの話、あんまり本気に考えようとしなくてもいいぜ。

……実は、ちょっと恥ずかしかった」

ややあって、エーベルは思い出したように言った。

「ううん、そんな訳はない。別に、そんなことは気にしてないから」
「ならいいけど」

その時、ぐう、と空腹を告げる音がした。

それに気がつく、思わずアイリスは顔を真っ赤にした。

「そろそろ、昼食の支度でもしなきゃだよな」

「何か、食べるものでもあるの？」

「一応、携帯食はある。だけど、あまり数は多くはないかな」

「それは持ちそう？」

「長引かなきゃ、大丈夫だろ」

適当に昼食が食べられそうな場所を探す。すると倒れてから間もない様子の木が見えた。

アイリスとエーベルはその倒木の方に行き、座りこんだ。

「ほらよ。お前のぶんだ」

「ありがとう。でも何か、申し訳ない」

「まあ、気にするな」

エーベルが袋から携帯食を取り出すと、一つアイリスに手渡す。

それは普通のビスケットのようなもので、所々に焦げ目が見られたが、味は悪いものではなかった。

「なかなか美味しい……」

「そうか、なら良かった。これは俺なりに作ったものだから、味も考えてある。だけど町で旅人向けに売ってるようなものはそうでもないぜ」

「手作りなんだ……」

アイリスはエーベル手作りの携帯食を食べるのに照れくささを覚えた。尚更、申し訳なく感じる。

「私、ある程度の料理は作れるから。道具とかあったなら、作ろうと思うのに」

「それは有り難い。でも残念ながら道具はないから、またの機会にな」

「ご馳走さま」

食事をとり終え、アイリスは立ち上がろうとする。

すると、エーベルは何かを思い出したように言った。

「ちょっと待った」

「え？」

アイリスは思わず彼の方に振り向く。

「話がある」

「何のこと？」

「いつまでもそうやって気前よくしてる訳にもいかないからな、それ相当の働きが必要だ」

「働き……？」

エーベルの表情が真剣なものに変わる。少しばかり不安を覚えたアイリスは、一歩後ずさった。

「まあ、要するにお前の烙印の力を貸してほしいってことだ。例えば、牢を抜ける時に使った力。俺が見る限りなかなかのものだった」「そう……だったの？」

「そうだ。烙印を持った人でも、これだけの規模で力を使える者は滅多にいない」

「私がそうだというの？」

「ああ。普通の烙印所持者ならば、自分の手のひらの範囲とか、それだけのもんだ」

「そんなこと……知らなかった」

初めて聞かされた事実には、アイリスは戸惑いを隠せない。

「俺はお前を安全な場所に案内すると言ったが、働きは当然のこと、安全じゃない」

「なら、どうして私なんかに！」

アイリスはエーベルの勢いに圧倒されていたが、思わず叫んでいた。

「俺は強力な烙印の力を持つ者を、ずっと探してきていたんだ――」

2. アルギート兄妹

強い烙印の力を持つ人を探し続けていたと言ったエーベル。

そんな彼は、烙印を持つ人々のために協力して欲しいとアイリスに頼んでいた。

また牢屋に入るかもしれないし、自分はまるで役に立たないかもしれないのにーそんな負の感情が心の中で渦を巻く。

彼を信じようとした自分が間違っていたのか、とまでアイリスは思っていた。

「悪い、驚かせたみたいだな」

「何よ……」

何事もなかったかのような調子に戻るエーベルだったが、アイリスはそんな彼を許せなかった。

いつそのこと、ここからどこかに逃げてしまいたいとも思っただれども、道も、帰り方すらも分からない。

不安といらだちは増していくばかりだった。

「烙印持ちは、その印を持ってるってだけで世間から白い目で見られる。だから、俺は烙印の力を使いながら動き続けていた」

そんなアイリスを見かねてか、気分を悪くした責任をとるつもりなのか、エーベルは話を始める。

「そう言ったって、私には何もできないのよ」

それでもアイリスはそっぽを向き続けていて、彼と目も合わせようともしない。

「それは決めつけているだけだ。脱獄のとき、思い出してみろよ？」

「あっ」

アイリスは牢屋を抜ける時に無我夢中で烙印の力を使った事を思い出す。

すると、少しだけ彼の役に立てたと思う事ができた。

「いい働きだったぜ。お前のおかげで俺も助けられた」

「もし、お前がこんな術使えなかったら、もしかしたら俺も処刑台の上にいたかもしれねえ」

「そう、だったんだ……」

アイリスは自分は助けられる側でエーベルが何もかもをしていたと思い込んでいた。

足も遅かったし、さぞかし足をひっぱったんだろうということも。けれども、彼に素直に礼を述べられると、いらだちは少しずつ薄らいでいったような気がした。

「でも結局、烙印持ちは皆同じだからな」

思い出したように、エーベルは言った。

「どうということ？」

「烙印を恐れる側にとっちゃ、烙印の力の差なんて全く考えてもいないってことだよ」

「……その人達が、烙印持ってるってだけで疎まれて、ひどい扱いを受けていたのなら、そんなのあんまりだよ……」

アイリスは手を震わせて俯き、言葉を詰まらせる。

「そうだな。お前の気持ちは分かる。彼らはきつと、俺達よりも辛い」

「そうね……」

「だから、力を持つ俺たちが何とかしないとならないんだよ」

「私が、何とかできるとでも言うの？」

「お前一人じゃ無理ありすぎるだろ。烙印持った他の奴らと協力するんだ」

「協力、ね……」

アイリスは再び言葉を濁らせた。

今までうまく人と関わられてきていなかったのに、烙印持ちであっても他者と協力しようなんて言われても難しい話だ。

そんなアイリスを察したのか察していないのか、エーベルは元の調子に戻った。

「……わり、驚かせたな。この話は仕舞いだ」
会話はそれっきりだった。

沈黙の中歩き続ける間に日が落ちて、夜が近づいてくる。

鬱陶しい程に続く森景色も、様を変えてゆく。アイリスはその自然の摂理をこんなに肌で感じたことはなかった。

「そろそろ今日は休むか」

「そうだけど……」

エーベルの提案に、口をつぐませるアイリス。

「何か言いたいことでもあるのかよ」

「な、何でもない！」

「なら、いいけど。ちょっと焚き火にでも当たろうぜ」

彼らは辺りの木の枝の中で、薪に使えそうなものを適当に集めた。そして、エーベルは手の烙印を見つめてから、集めた薪に向けて光を放った。

するとみるみるうちに薪の炎が大きくなっていく。

「烙印ってな、こんな使い方もあるんだぜ。便利だろ？」

「そうだけど……。でも、すごいよ」

「大したことじゃねえよ。見方の違いってやつだ」

いつの間にやらアイリスの顔からは、微かなものではあったけれども微笑みがこぼれていた。

「今、笑った」

「そ、そうなの!？」

そのアイリスの様子を、エーベルは見過ごしていなかった。

「見間違いないかなければな。お前もこうやって、笑えるんだな」

「笑い方を思い出せたってだけ」

「だけど、思い出せただけ幸せだったな」

「そうだね……」

照れ隠しのように、アイリスは小さく俯いた。

「早めに休んどけよ。俺の上着でも布団の代わりにしとけばいいさ」

ほら、とエーベルは着ていた黒い上着を脱いで、乱雑なままアイリスに投げ渡した。

思わずアイリスは目をつぶったが、エーベルの上着はちゃんとアイリスの腕に収まっていた。

「いいよ。返す」

「冷えたら困るだろ」

アイリスはエーベルに上着を突き返そうとしたが、彼は全く持つて受け取る気がないようだった。

「そう言っても、眠れる筈ないじゃない」

「はあ？」

「……寝てる間に、何もしない、よね？」

何かあれば烙印の力を使ってしまえばいい話だけど、落ち着かなくてうまく使えないかもしれない。

「……当たり前だ！ 俺はこの火を見張ってるし、もし何かあったら叩き起こす」

「で、でもそれだと……」

「俺が寝ないってか？ いいよ、んなもん。体力は自信あるし休憩時間にちよつと仮眠とれば平気。……って待てよ」

何かを思い出したようなエーベル。

「ん？」

「俺が寝たらお前を危険にさらすことになるぜ！？ それでもいいのかよ？」

「だ、ダメダメ！」

今気づいた、といったかのようにアイリスは慌てふためいた。

「……でもやっぱり眠れないかも」

すこしばかり黒の上着を握りしめて、ふて腐れるアイリス。

「ずっと歩き通して疲れただろ？ 休んでおいた方が後のためにも得だ」

「……頑張ってみるよ」

アイリスが目を閉じ、眠る体制になるとエーベルは目線を焚き火の方に移した。

夜が深まっていく中で、焚き火は闇に抗うように光を放ち、燃え続けている。時々小さな火花が炎の中から土へと逃げ出すように飛び散って、消えていったりもした。

追加の薪を投げ入れて、エーベルは焚き火の成り行きを観察し続ける。

（まったく、不思議なものだよな、俺……。これじゃ、あの時と何もかも変わらないかもしれないねえのにな……）

パチリ、パチリと、火花が弾ける音がする。

それでも夜が深まるにつれて空気も冷えていって、エーベルは軽くくしゃみをした。

（今日は冷えるな……）

秋の夜の微かな寒気に、エーベルは焚き火に手をかざす。

上着はアイリスに渡したために、彼が上に着ているものは七分丈のシャツ1枚だった。

（けど、とりあえずこいつを助けて、ナージュまでたどり着けなきゃ、烙印持ちの解放なんてできっこない）

眠るアイリスを見て、エーベルは考えにふける。

そのまま牢を出てからの最初の夜は更けて行ったのだった。

それから、三日の間歩き通した。

昨日くらいから山の中に入っていて、上り坂が多くなっていった。その間、エーベルは夜もずっと起きています。昼の休憩時間に仮眠をとっているようではあるが、自分のせいで彼は満足に寝ていないと思うとアイリスは申し訳ない気持ちになった。

それに、三日前にエーベルが言ったこと。それはこの旅とも言えない道中の間、アイリスの頭に残っていた。

わざわざ危険を冒してまで彼の助けをして、何になるのだろう。

そんな疑問も生じたけれど、アイリスにとっては自由——もしかしたら命をも救った恩人である。

だけど当のエーベルはその後、何事もなかったかのようにアイリスに接した。

アイリスもアイリスで用がない限りは黙ったままであったので、エーベルの真意は分からないままであった。

「目的地まで、あとどれぐらいかかるのか判る？」

アイリスはしばらくぶりに声を出す。

「んーと。もう3日は歩きっぱなしだからな、もうちょっとで着くと思うぜ。山に入ってから大分経つし」

「ということは、山に何かがあるということ？」

「そういうことだ」

「どうもありがと」

それからのこと、二人がしばらく歩いていると村のようなものが見えてきた。その村は、盆地のようで周りを山に囲まれている。山の中でも、高地が低い場所という印象だ。

「そこに見えてきてる村が目的地だ」

柵に囲まれた村の入り口を見て、エーベルが言った。

ひっそりと立てられた看板には、ナージュ村と書かれている。

「あの村……」

「ここに住んでる人は、烙印を持つ人に変な偏見なんざ持ってない。とりあえず、当分何とかやってけるだろ」

「私のことも、分かってくれるのかな……」

「心配いらねえさ。村長のばーちゃんは烙印持ちだし、烙印を持つ者を積極的に保護している」

「そうなの。良かった。こんな場所があるなんて……」

アイリスの声は震えて、小さくなる。遂にはアイリスは感激のあまりにしゃがみこんで、泣き出してしまった。

「お、おい。こんな所で泣くなよ」

「だ、だって」

アイリスは続けた。

「そう思うと……今まで引きこもりだった私が、情けなく思えるの。今まで、友達もいなくて、ずっと……寂しかったから。信じられそうな人がいることって……こんなにも嬉しい、ことだったのね……」

しゃくり混じりで、アイリスはなんとか言葉を紡いでいく。

「やっと素直になったか。もういいから前向いて、もう少しなんだから歩け。な？」

「うん。分かった……」

アイリスはゆっくりと頷くと、立ち上がって再び歩き始めた。

村にかなり近づいたところで、一人の少女がこちらを見続けた。ことに気がついた。

「やっぱ、あ、兄貴?!」

そして彼に向かって駆け寄り、走った勢いで思いきり抱きついた。少女の頭の、エーベルとよく似た色のポニーテールが揺れる。

その大胆さに、アイリスは思わずあっけにとられていた。

「おい、セリシア」

エーベルの一言に、セリシアと呼ばれた少女は我に返り、彼から離れる。

アイリスは彼女を見て、髪だけでなく顔や雰囲気もエーベルとそっくりなことに気がついた。

「兄貴! 帰りが遅かったから、ずっと心配していたんだよ……」

「悪いな。待たせちゃって」

「まさか、軍にでも捕まったんじゃないだろうね？」

「……そのまさかだ。それで出るのに、ちょっと手間取ったんだな」
「処刑されたらどうするんだよ! ……とまあ、無事なだけいいけどさ」

あきれ半分の表情のセリシアだったが、彼女はエーベルの後ろの

アイリスに気づき、目を合わせる。

「……ん？ で、その女の子は誰だ？ ……まさか彼女ではないだろうけど、ね」

「彼女じゃねえ！」

「彼じゃない！」

エーベルとアイリスの返事はつい重なってしまった。二人は互いに顔を見合わせて、それからすぐにふいと背ける。

「まあ見事に息が合っちゃって。さっきのは冗談だから安心しな。でもその子、目が赤いようだね。女の子を泣かせたなんて、承知しないよ、兄貴……？」

「それには訳があつてな……。簡単に言うところいは、烙印持ちで、俺の隣の牢屋にいたんだ。そして俺が脱獄ついでに助けて、この村にとりあえず保護しようとした。で、この村を見て感激のあまり泣いてしまったと」

「何だあ。そういうことか。君、ナージュ村の良さが分かるんだね」
アイリスに目を合わせて、日だまりのように笑うセリシア。

「うん。素敵なところ」

「気に入ってくれたなら嬉しいよ」

「で、セリシア」

嬉しそうなセリシアのもとに、エーベルが真剣な声で呼び止める。

「何だ？」

「こいつの烙印の力はかなり強力なものようだ。だからいずれはその力で烙印を持った人を解放する、手伝いをしてもらおうかと思っている」

「兄貴、その子を自分の都合でさらに振り回すつもり？ ……いくら何でも可哀想じゃないか」

「セリシア。そ、そんなつもりじゃなかったんだ」

「そうか。でもお客さんなんだし、大事にしなくっちゃ。で、その子の名前は？」

「アイリス・ウィルド。よろしく……」

「まあ、固くなるなよ。あたしはセリシア・アルギート。この通りエーベルの妹で、この村の自警団の一員だ。兄貴と違って烙印は持っていないが、烙印を持ってる人々を匿うようなことはしてるね」

セリシアと名乗った少女はアイリスに向けて手を差し伸べた。手袋をしていたため烙印の有無は分からないが、嘘ではないだろう。

それに対して、アイリスは少しだけためらう様子でセリシアに問いかけをした。

「あなたは、何も思わないの？」

「何だ？」

「烙印を持つ人のことを」

「俺の妹にわざわざこんなこと聞く必要あんのか？」

「兄貴は黙ってな。あたしはまあ、この通り兄貴が烙印持ってるから、烙印持ちを嫌だと思ってるし、怖いとも思ってる。でも、術が使えて羨ましいなー、なんてのはある。何というか、無い物ねだりってやつかな」

「ありがとう。烙印に対する考え、言ってくれて」

「そんなんいいって。まずはほら、握手だ、握手」

セリシアは差し出した手を、握って欲しいかのように肘から軽く振った。

アイリスは少し躊躇いはしたものの、恐る恐るセリシアの手を握る。セリシアはそれに気づくと、アイリスの小さな手を柔らかく、しかししっかりと握った。

「アイリスはしばらくこの村にいるんだよね……。だからもし良かったらんだけど、年も近いだろうし、あたし、アイリスと友達になりたいんだ」

「友達？」

「駄目……かな？」

「駄目じゃ、ない。寧ろすごく、嬉しいの」

アイリスの顔から笑みがこぼれた。優しい眼差しの暖かい笑顔。こんな私に、友達になって欲しいと言ってくれるなんて。アイリ

スは考えていた。きっと、家に引きこもっていたままだったらこんな感情を感じることは絶対になかっただろう。

「あははっ！ ……アイリス、笑うと可愛いじゃないの」

「そう……なのかな？ でも私、暗いしなんだし、そんなんでもいいの？」

「そんなこと気にするとも思ってたのか？」

「また私、泣いちゃいそう……」

「きっと、辛かったんだろうな……。暫く、泣いていればいいさ」

アイリスは村の入り口で、気が済むまで静かに泣いた。それをエーベルとセリシアは、黙ったままで見守っていた。

アイリスの新しい生活は、いままさに始まるうとしていたのである。

3. 烙印の隠れ里

エーベルとセリシアに連れられて、アイリスは村長の家に向かった。

「どうやら、村の名前はナージュ村と言うようだ。」

セリシアが言う限り、ナージュ村は何らかの労働をして村内を豊かにすることを対価として、魔術師——烙印を持った人々を保護している。

だが、ナージュ村は旅人も滅多に通らないような僻地にあり、保護する人の数は大して多くない。アイリスみたく、ナージュ村の関係者と関わらない限りは村の存在を知らないだろう。どこかでは、とうの昔の、幻の村と示唆されているらしい。

「春になれば、ナージュの辺りには霧が掛かるんだ。まあ、春霞ってやつか？」

「でも、あの霧程面倒なものはないけどな。あれが嫌で、俺は春は村にいなえし」

セリシアとエーベルはこの地方の春霞についてアイリスに話した。
「春霞……。きっと深く、外の世界と遠ざけるのでしょね」

「そうなんだ。でも、外界と断絶されているからこそ、村の皆は絆を深めて団結していくんだ。兄貴はそこに入る気はないようだけど」
セリシアが話し終わると、アイリスは伏し目がちに下を向いた。
何かを、考えているのだろう。

「……」

「どうしたんだ、アイリス」

「また、ちょっと不安になっただけ」

「何かあったら、遠慮なくあたしに言いなよ。話はいつでも聞いてやるからさ」

「分かった、ありがとう」

村長の家に着くと、エーベルはドアノブをノックした。

「誰じゃ？」

中からは老婆と思わしきしわがれた声が聞こえる。

「俺だ。エーベルだ。帰りの挨拶と、少女の保護を頼みに来た」

「おお、エーベルか。よくまあ、無事じゃったな。ささ、中へ入り」

老婆がエーベルを歓迎するも、セリシアは何やらアイリスに囁いていた。

「兄貴ったらまた偉そうなこと言って…。村長に見栄を張りたいたいんだよ」

「そんな感じはするわね」

アイリスも同意する。

「何か言ったか？セリシア」

エーベルはセリシアのひそひそ話に気がついたようで、セリシアに問う。

「なんでもないな」

「嘘付け」

しかし、セリシアの話に深入りするつもりはなかったらしい。それだけ言うと、家のドアを開けた。

「エーベルや。久しぶりに顔を見たの。しかし最後に顔を見たのはいつだったかの？」

「2ヶ月ぶりだな」

「まったく、心配させおって。これ以上たった1人の可愛い妹を困らせるんじゃないぞ……。といった所で、お前さんは聞く耳を持たないだろうね」

「悪かったな。ばーさん、無事なだけいいじゃねえか」

「また反省しない。もうわたしや説教するのも馬鹿馬鹿しく思えてきたわい」

村長の老婆は背が縮み、杖を軽くついていたが、口ぶりや杖の振り回しから、まだまだ元氣そうだった。しわのある顔には、年が重ねた貫禄と知識が垣間見えているようだ。

そして老婆はエーベルの隣にいたアイリスと目を合わせた。

「そのべっぴんな娘さんが烙印を持っているとのことかね、エーベル」

「そうだ」

アイリスは強気そうな顔つきと表情から、近寄りがたそうな雰囲気をしてるものの可愛らしい顔立ちをしていた。もともと本人は自覚がなく、引きこもり生活をしているために見た目にはあまり気を使っていないようだが。

「はい。私です」

アイリスは老婆に自分の右手の甲にある烙印を見せた。

「そなた、名を何という？」

「アイリス……です」

「アイリスか。わたしやナージュ村村長のソニンじゃ。そなたはこの村に住みたいと申すか？」

「はい。……私はもう、帰れませんから」

「親御さんは心配しとるんじゃないか？」

「もう両親も、私に呆れているんだと思います。それに、私がいなくなることで、軍とも関わらなくなつて、向こうの面倒も減ると思いますから。私の存在自体があのだに、いらなひんです」

「なんだかんだ言つて、親御さんの方を心配しとるんじゃないや。でもな、アイリス。自分の存在を否定するのは間違つとる。それだけ覚えとき」

「……はい」

アイリスは弱く頷いた。あの老婆には何もかもを見透かされている、そう感じられた。

「分かるならいいんじゃない。さて、この村にいるからには何か仕事に

就かんと。何か得意なことはないのか、アイリス？」

「一応、家事全般は出来ます」

「体力に自信は？」

「ないです。昔から運動音痴で、さっきまでは歩くのに精一杯でした」

「そうかそうか。じゃ、宿屋の方に掛け合うよ。あそこなら、部屋も空いとるし、手伝いをするのも出来ると思うからの」

「ありがとうございます」

「そうじゃ、この書類に書けることは書いとくれ」

ソニンから手渡された書類にアイリスは目を通した。あまり難しいこともなかったので、さらさらと書き上げる。

「へえ、アイリスはあたしの一つ年下なんだな。16歳になったばかり…か。もっと近ければ、誕生日祝えたのにな。」

セリシアはアイリスの生年月日を見て、目を輝かせる。

「祝う？ ……ありがとう。今は気持ちだけ、もらっとく」

それに戸惑うアイリス。今まで友達に誕生日を祝ってもらったことがあまり、比較的最近では全くない人生を送ってきたために、無理もなかった。道中の木の葉の中にも、赤く染まりあがっているものがある。アイリスは夏の終わり頃、生まれであるため、誕生日はまだ先なのであった。

「誕生日？ 俺は人の誕生日も自分の誕生日もロクに覚えてねえけどな」

エーベルは腕を組み言い張る。

「そんなことで威張るなんて失礼だな。兄貴、自分の年分かってるのか？ とりあえず言ってみ」

「20は過ぎてないはずだ。だからたしか、19だったか」

「それぐらいは分かっているみたいだな」

そんな掛け合いをする兄妹に、アイリスは思わず笑いをこらえずにはいられなかった。

「何が可笑しいんだよ？」

エーベルはアイリスの珍しい表情を見て、何かを感じた様子であった。

「何となく」

「理由になってねえ。でも、お前がこんな風に笑うとはな」

「面白いことには笑いたい。でも、相手を馬鹿にしてないかとか、心配になるの」

「アイリス、お前さんはそんな風な気を聞かせられて、優しい心を持っていると思うぞ。わたしはかれこれ80年ほど烙印を持った人々を見てきたが、悪い人はいなかったからの」

ソニンは3人の会話に口を挟む。

「そうじゃ、書き上がったのなら、わたしにそれをよこしな」

アイリスは書いた書類を渡す。

「ちゃあんと、大事に取っておくよ」

「はい。色々と、ありがとう……ございました」

お辞儀をして、アイリスは感謝の言葉を伝える。

この人の前ならば、素直になれる。そんな思いをアイリスは感じた。

「そうだ、村の案内はまだだったな」

「そうね」

「とりあえず案内してやるからついて来い！」

村長の家から飛び出すエーベル。アイリスはエーベルの後を追おうとする。

「お茶も飲んでいかんで！」

「兄貴は何がしたいんだか。誤解を招きそうだな」

ソニンやセリシアにとってこんなことは日常茶飯事なのだろう。全くもって冷静さが崩れていなかった。

4. 村々を見つめて

ナージュ村の村長、ソニンの家から出て少しした所で、走り出したエーベルは足を止めた。そこには、様々なものが売っている商店が数軒立ち並んでいる。

「走るの、早すぎ」

アイリスは肩で息をしながら、エーベルに文句を言った。

「悪いな。思い立ったらすぐに走り出したくなるんだ」

「私、運動苦手なんだから」

事実、アイリスはエーベルを追いかけることで精一杯だった。あともう少し村が広くて、周りに何もなかったら彼を見失っていただろう。

「ここがナージュの商店街だ。必要なものはまあこたわりさえなければなんとか揃う」

「そうなのね」

説明をつけるエーベルと、反応の薄いアイリス。

「アイリスは買い物とか、好きじゃないのか？」

「好きじゃない。外に出なきゃ、いけないし。……面倒なものよね」

「女って皆買い物好きだと思ったけどな。いつか昔セリシアを連れて街のもっと大きい商店街に行ったら、セリシアは2時間くらい帰ってこないで、俺が探しに行ったら残りの買い物に付き合わされたんだ」

「必要なものがあれば、それでいいのに」

「だな。その意見には俺も共感」

エーベルがそう言うと、アイリスは顔に微笑を浮かべた。

味方がいてくれるという事実、アイリスはぎこちないながらも徐々に安心感が増えていくのを覚えた。

「そうだ、時々この辺で市をやったりする」

思い出したように目を丸くするエーベル。

けれどもアイリスはふと自分が今まであまり出ることが出来ない感情にふと思考を立ち止まらせていたためか、返事を返す瞬間を逃してしまった。

それからのこと、2人は商店街とは言えないような商店街を出て、村のあちこちを巡る。それは畑であったり、工房だったり、集会所だったりした。

これからお世話になるかもしれない。アイリスはそう考えて、軽く目を通しておいた。

「ちよつと、見せたいものがある」

周りの景色を目に残そうとするアイリスに、エーベルは横でそつと声をかける。

「見せたいものって？」

「それは秘密だ」

エーベルは悪戯めいた表情をちらりとアイリスに向けてから背中を向け、再び歩き始めた。

何か裏がありそうだと思いつながらも、アイリスはエーベルが見せたいものの正体が気になっていた。純粋な好奇心から、アイリスは彼について歩いた。

二人が歩いているのは、ナージュ村の小道。その小道は、林に繋がっているようだった。

「ここって、村の外に続く道なの？」

エーベルが言っていたものはこの林の中にあるのだろうか。そう、アイリスは疑問に思っていた。

「とりあえず、村の外に出る訳じゃねえよ。ここから、もう少しだけ歩くぞ」

林道を進んでいくと、アイリスは道の先に明るい所があるのを理解した。

その光差す場所へ向かって、小道に沿って進んでゆく。

「ここは……？」

アイリスは目の前に広がる情景にぼかんとした。

「まあ、とりあえず周りの景色を見てみなよ」

エーベルの勧めに、アイリスは素直に周りを見渡した。

「俺が見せたいものっていうのは、ここだ」

「わざわざ、私のために？」

アイリスはエーベルが自分のためにここまですることがよく分らなかった。恋人同士ではないし、ましてや会ってから殆ど時は経っていない。それがさらにアイリスの疑問のかさを増していった。

「ああ。せっかくナージュに世話になるんだったら、ナージュで一番、綺麗な場所は見ておくべきだろう」

エーベルの言葉は表だけ見れば気取ったように見えても、実際は飾らない、あっさりとした口調であった。

「それだけ？」

「そうだな」

その場所は小さな芝生の生えているような広場のようで、周りの山々が見渡せ、所々に花も咲いている。あれは、秋桜だろうか。安全のために柵はついていて、下は落ちたらひとたまりもないような急な崖になっていた。

アイリスは視線を遠くにやって、紅葉した木々で覆われた山を見つめる。これだけ遠くのものを見たのは、しばらくなかった。そう感じながら。

「外の世界には、こんなに綺麗な景色があったのね……」

「ああ。引きこもってるだけじゃ、こういった景色を見ることもねえ」

「どうせ私は、引きこもりよ」

「なあアイリス、ずっと外に出ない生活を送っていて、……楽しかったのか？」

エーベルの核心を突く問いかけに、アイリスは一瞬言葉を詰まらせた。

「楽しかったんじゃないかしら」

アイリスは皮肉めいたように答える。

「嘘付け」

「嘘じゃないもの！」

エーベルに背中をむけてしゃがみ込むアイリス。エーベルは皮肉を皮肉で返したが、それは逆効果だった。アイリスは、それを真に受けてしまっている。エーベルはその事を予期できずにいた。

「……外に出て、学校に通っていた頃はもっと酷かった。周りの人皆が恐ろしくて恐ろしくて。私、何も言えなかったのよ？ 助けを求めればかえって、空しくなっていただけ。……エーベルには、きつと分らない。あなたは、幸せ者なんだから」

アイリスの口数が一気に増えたこと、話していること、そして彼女が自分の名を初めて言ったことに、エーベルは啞然とする。

「アイリス。……それは現実から逃げ出してたってことか？」

「逃げ出すに決まってる！ 何も変えられないって分かりきっていたの！！ ……この、分らず屋！」

アイリスは振り返ると、林に向かって一目散に駆けていった。その目に涙を流しながら。

「おい、待てよ——」

エーベルの叫びに聞こえないふりをして、アイリスは走り続けていった。

やっぱり、信じられるような人じゃなかったんだ。誰も信じないのが、正解なんだ。

アイリスの答えはそんな風に行き着こうとしていた。

知らない村、知らない林。そうであってもアイリスはただ直感的に走ってゆく。土地勘なんて、気にしてはいられなかった。

ちょうど林の出口が見えてきそうな場所。そこに1人の少女が歩

いているのが見えた。

少女はやや早足気味で、赤く腰までかかる長いポニーテールを揺らし、兄を探そうとしていた。

あれはセリシアだ。アイリスは一目で少女が誰かが分かった。

彼女とは出会って間もないが兄であるエーベルとそっくりな髪色に、忘れる筈もない。

「アイリス！？ ……兄貴はどうしたんだ？」

セリシアは走りゆこうとするアイリスの右腕をつかみ、事情を聞こうとする。

「私を、あの人に会わせようとししないで」

掴まれた腕を解こうとするアイリス。

「一体、何があったんだよ！？」

「……後で話す」

「やれやれ。じゃ、場所を移そう。……兄貴には、聞かれたくないんだろ？」

アイリスはセリシアの優しさに感謝しつつ、軽く頷いた。

「アイリス、兄貴と何かあったのか？ とりあえず言ってくれ。あとであいつのことはあたしがしばいてあげるから、さ」

「あの人は、私のことを何も分かってないんだ」

「……ん？ それは、どういうことだ？」

セリシアは抽象的なアイリスの答えに、首を傾げた。

「私、ずっと一人ぼっちだったのに、あの人は私をさらに追い詰めようとした。きっと、孤独がどんなものか、分かってもいないのよ！」

アイリスは元々泣き顔であったものの、さらに涙をぽたぽたと落とす。

「そういうことか。……兄貴はな、あたしたちが両親を亡くしてから、ずっと一人であたしを育ててくれたんだ。だから、あたしよりも、沢山苦勞してる。その苦勞を隠すために、あいつは明るく振る

舞ってるし、敢えてアイリスに厳しくして、アイリス自身に苦勞に負けて欲しくないって思ってるんだと思う。……兄貴のこと、それだけは分かってくれ」

昔話を語ったセリシアは、どこか切なそうな目であった。

「ありがとう。少し、心が軽くなった」

「どういたしまして」

「きっと、あの場所にセリシアがいなかったら、私はどうしようもなかったと思うの」

「あたしはただ、兄貴のことだからあの場所に向かっているんだろうな、って思っただけだ。兄貴は村に帰ってくるといつつもあの場所に行くんだ。そして、山に向かって深呼吸なんてしてる。……壮大な景色が、好きなんだろうね」

「それなのに、私の話聞いたりとかさせちゃって、ごめん」

「いいっていいって。うちの兄貴が迷惑かけたようだからな。じゃ、宿屋まで送ってくよ。兄貴には、あたしから言っとくから」

「本当に、ここまでしてもらっていいの？」

「全然。あたしたち、友達でしょ？」

友達でしょ。その言葉はアイリスは嫌いだった。そう言った友達に、アイリスは裏切られたことがあるからだ。

しかし肩を優しくポンと叩いて、笑顔で背中を押してくれるセリシアのその言葉からは、邪気が全くと言っていい程感じとれなかった。

暖かいセリシアの人柄に、アイリスは立ち上がったように感じたのであった。

5. 平穩のはじまり

宿に着くと、アイリスは部屋にあるベッドに倒れ込む。

宿の主人は、アイリスの事情を知ると快く部屋を開けてくれたことにアイリスはほっとしたのだった。

しばらくぶりのベッドの感触に心地よさを感じながらも、どこかアイリスの心の中には煮え切らない気持ちがあった。

私はただ、ここに逃げ出そうとしているだけなんじゃないだろうか。私は、言葉で人を突き放してまた独りになろうとしているのだろうか。

そんなネガティブな方向に考えが転がっていく。そして知らないうちに、その転がっていく考えは深い谷に入り込んでしまいそうだ。はまってしまったらもう、出られなくなってしまういそうな。

ブレーキをかけて立ち上がろうと試みるアイリスだったけれども、なかなか考えの塊は止まってくれそうになかった。

いっそのこと、このまま寝てしまおうとも思った。

目を閉じてもなかなか寝つけはしなかったが、長旅で疲れていたためか、しばらく時が経つと自然と眠りに落ちてしまった。

アイリスが見たのは、かつて学校に通っていた頃の、教室の風景。クラスメイト達は、アイリスを見てあざ笑うような目をする。

「ねえアイリスさん、あなた、存在が邪魔なのよ？」

「あたしたちについてきて、真似しないでよね」

違う！ そんなつもりじゃなかったのに！

「あんた、係の仕事はやらなくていいわよ」

「どうせ、役に立たないんだから」

……私だって、皆の役に立ちたかった。

「烙印を持っている人になんて、関わる必要性を感じない」

「そうだよね」

「元々アイリスさんってよく分からなかったけど、烙印持ちって知ってからは関わりたくもないよ!」

「あはははっ! 言えてるーっ!」

どうして私ばかりこんな目に遭うの!?

確かに、私の悪いところも探そうとすればいくらでも見つかる。

でも、少し皆と違う部分があるからって! 烙印があるからって!!

……人間は、とても醜い存在、ね。

ちよっと人と違うことができるからってそれを排除しようという態度が憎い。恨んでも恨んでも、きっと他の誰かが出る杭を打とうとする。

そのくせ仲間にはべたべたと取り繕って!

怖い。人と話すのが怖い。人と関わるのが怖い。

……私に残された逃げ道は、他人を一切拒絶することだけ。そこまでに、あの時は追い詰められていたから――。

目覚めはつとすると、アイリスは自身の頬に涙が伝わっているのが感じられた。

もしかして、泣きながら寝ていたの? と、アイリスは少し恥ずかしくなる。

夢を見たのはしばらくぶりであるが、悪夢なら見たくはない。

思い出したくないことを思い出してしまったなと感じながら、アイリスは3年前に思いを馳せた。

もしかしたら、あの時は反撃されるのが嫌で、逃げ出していただけじゃないの? 誰にも迷惑をかけたくなって、ただ自分の心を氷付けにしたんじゃないの?

アイリスは繰り返し過去の自分に問いてみるが、彼女からの返答はない。アイリスは過去の自分に会いたくなかったが、逆に会うのが怖いとも思っている。

そこに、ふと耳に入る音はアイリスの部屋の扉をノックする音だった。

「おはよう、アイリスちゃん。起きていたのね。昨日は夕食も食べずに寝て……。よっぽど疲れていたのね」

「あ、おはようございます」

扉を開けたのは、宿屋の女将だった。

「あら、目が赤いじゃない。昨日はうなされていたようだし……。くれぐれも、無理はしちゃ駄目よ。今、朝食を作るから、もうちょっと待っててね」

「はい」

無理をする、その言葉はアイリスに今までは無理をしないとやっていけない足場に立っていたことを気づかせた。

夢はどうやら眠りが浅いときに見るらしい。その時に、きっとアイリスの疲れが夢となって現れたのだろう。

食堂に行き、朝食を口にして、アイリスは気づく。

どこの家庭でもありそうな、パンと卵と野菜のスープといったメニューであったが、味の一つ一つが心に響くようなものがある。お袋の味、と言われるのはきつとこんなものなのであろう。

「どうかしら？ 好みの味じゃないってことはないかい？」

「……いえ、そんな事はありません。寧ろ、とても美味しいです」

「なら、良かったよ。アイリスちゃん、ここを手伝うんだったなら後でこの味を教えるからさ」

「ありがとうございます。でも、そんな簡単に教えてもらっちゃっていいんですか？」

「いいさいいさ。そんな事は、全然気にしないわ。私の味を知ってくれる人が増えるのは、嬉しいことだからね」

「アイリス、起きてるか？」

男勝りな、少女の声。その声の主はアイリスでも分かる。

「……セリシア？」

「兄貴が、あんたに会いたがってたんだ。……気乗りしないのは、分かってる。あたしも一緒に行くから、朝メシ食べたら宿の前に、来て欲しい」

「セリシアは、困らないの？」

「何が？」

「私なんかに、付き合ってくれるなんて」

「あのなあ、アイリスひとりだったら、もつと気まづくなるだろう？」
アイリスの考えていたセリシアの思いとは裏腹に彼女は笑い飛ばして答える。

「ありがと。……あいつのこと、許さないとかな？」

「それはアイリスの気持ちしだいさ」

「……そうね。じゃ、私は支度してくるから」

「ああ」

支度を終えて、アイリスは宿の玄関に出た。

朝の風が、なんとも心地良い。それに、山の中にあるためか空気も清純として美味しかった。

「それじゃアイリス、行こうか」

「うん。……けど、何処へ？」

「そりゃ、あたしの家に決まってるじゃないか」

「そうだったね」

セリシアの家は、宿からそう遠くはなく、寧ろかなり近い方であった。エーベルと二人暮らしのようで、あまり広くはない。

「兄貴ー、アイリス連れてきたよ！」

セリシアは扉をノックする。

「入ってくれ」

声は正しくエーベルのものであった。

「入っていいぞ、アイリス」

戸惑うアイリスに、セリシアは促す。

「お、お邪魔します……」

「こっちに來てくれるとは思わなかったぜ」

アイリスが入ってすぐの所に、小さいながらも居間があった。エーベルはそこにあるソファアでくつろいでいる様子である。

「兄貴、そんな事言って。アイリスはちゃんと來てくれたぞ」

「……昨日は悪かったな、アイリス。少し厳しいことを言い過ぎた。俺も、烙印持って、苦労してきたというのにな」

エーベルは続けた。

「……お前、捕まる前も大変だったんだな。ずっと独りで抱え込んでいてさ」

「そう。本当の意味での味方なんて、いなかった」

「俺も、この手の烙印のせいで、ずっと俺を疎む連中から逃げていた。セリシアが味方してくれたけど、苦労はかけっぱなしだ。な？」

セリシアは頷く。

「そうだな。あたしは苦労してる。でもそれ以上に兄貴には苦労がけたくないんだ。兄貴は後々まで苦しみ続けないように、今すぐ苦しい思いをし続けているんだと思うんだ」

「ご名答。伊達に俺の妹やってないな」

「何だよ、それ」

セリシアの言葉は冷たいようなものの、彼女は笑いながら話している。

そのことにアイリスは気づかなかったが、セリシアの思いはなんとなく無意識下で理解した。

「エーベル」

「どうした？」

「……ごめんなさい。私も勝手に怒って、あなたの考えを勝手に読んだようなつもりでいたこと」

「それぐらい気にするな。誰だって誤解し誤解されるようなもんだ。

誤解を恐れてちゃ、分かり合うこともねえからな」

エーベルは笑っていた。

自分の過ちをこういとも簡単に許すなんて。その寛大さにアイリスはぼかんとする。

「兄貴にしちゃ、いい事言うじゃないか」

「そうね。私自身誤解を恐れていると思うし、人を誤解していたと思うから」

「ほらな。言っただろ？ ……まあしばらくは、この村でのんびりやってくれ。俺も、休みたくなった」

そう言うと、エーベルはソファアに横になった。彼も、長く家を空けていたためか疲れたのだろう。

アイリスも、この平穏な生活の訪れにほっとしたような気持ちを感ずるのであった。

1. 宿の地下

アイリスの手伝いは、その日のうちから始まった。宿屋の女将であるシェリーに連れられて、食堂の裏に案内される。

そこは控え室になっており、あまり広くはないものの一休みできるくらいのスペースはあった。仕事をしているのだろうか、周りに人はいないようだ。

「アイリスちゃん、これからあなたには宿屋の雑用をやってもらわ。今日は疲れているようだったら、あまり無理しないでね」

説明するシェリー。

「大丈夫です」

アイリスは正直に自分の体調と相談すると、まだ完全に疲れはとれていなかった。しかし、何もしないでこの村に居ついているのは悪いような気がする。

「例えば掃除だったり、食器洗いだったり、洗濯といった所ね。私が指示するから、とりあえずはそれに従ってもらえればいいわ。これで大丈夫かしら？」

「はい」

自分から行動を起こさないと仕事が出来ない所でなくて本当によかった、とアイリスは思う。とりあえず何も考えてなくても、指示通りに動いていれば仕事になるからだ。

「じゃあ、今から洗濯に入るわよ。水くみ場まで案内するから、そこに水を汲んできて頂戴。私はその間に洗濯物をこっちに持つてくるから」

バケツを2つ渡すシェリーに、アイリスは頷いた。

洗濯は実際に毎日のようにやったことがあるから分かっているが、家事の中でも結構な重労働である。洗濯をする機械なんて気の利いたものはまだ作られてはいないため、手洗いだ。そんな機械があれば便利なのに、とアイリスはいつも思っていた。

水を汲み終わって、庭の方へバケツを運ぶ。そこには、シェリーが待っていた。

「道具も洗い物も持ってきたわ。さあ、始めましょ」

洗い物の3分の1程度がアイリスに渡された。アイリスは洗濯板と石鹸を手にとって、洗濯を始めた。

「大分洗うの早いわね」

アイリスに話しかけるシェリー。

「私、家事は結構やってたんです」

でも、アイリスがふとシェリーの様子を見ると、それでもシェリーは丁寧かつ迅速に洗い進めている。

やはり、キャリアの強いというものののだろうか。けれど、シェリーは鼻歌なんか歌っていたりして、かなり余裕そうな感じである。

「私、速いほうなんですか？」

少し間をおいて、アイリスはシェリーに尋ねた。

「そうよ。他の子達はシャツを一枚洗うにも時間がかかりすぎていたわ」

「そうなんですか……」

アイリスが引きこもる以前にも母親には様々な家事を手伝わされていた記憶がおぼろげながらもあるから、その実感が湧かなかった。が、アイリスはこれ以上気がそれると集中力を失うと思い、黙って洗濯のほうに集中した。

「おかげで思ったよりも早く終わったわ。ありがとね」

洗濯物を干し終わって嬉しそうなシェリーに、アイリスは頷いた。

「それは、私が手伝ったからですか？」

「そうに決まってるじゃない。アイリスちゃんは、私達の役にたったのよ？」

「……そうですか。それなら嬉しい、です」

自信がなさそうにうつむき、下目線で穏やかな表情をするアイリス。

「人の役にたてることって、嬉しいでしょう？」

「はい。……私、思えばあまり人の役にたてることは出来ていなかったような気がします」

「過去は気にしちゃだめよ。今、役に立てることがあるならばそれを役立てなさい」

シェリーの叱咤に、アイリスは自分の手にある烙印を見つめた。ひよつとしたら、この忌まわしき烙印も何かの役にたつのであろうか、なんてことを考えてみたりする。

現に、エーベルは彼なりに烙印を持っていること、烙印の力を役に立てようと行動を起こしていることを思い出した。

「烙印のことかしら？」

「え？」

「あなたの目線を見れば、誰だって分かるわよ」

突然声をかけたシェリーに、アイリスは少しうろたえたような声をあげた。シェリーは続ける。

「だって、この村は烙印を持った人が多くいるのはあなただって知っているでしょう？」

「そのくらいは知ってます」

「あなたに教えるわ、アイリスちゃん。私の宿屋の地下で、烙印を持った人が月に数回、集まってるのよ。確か今日は、その日だったような気がするわ」

「そう……なんですか」

「夜になったら、食堂に来てみるといいわ。案内してあげるから。」

私の息子も、烙印を持っているの」

「分かりました。いろいろと、ありがとうございます」

「じゃ、仕事の続きをやりましょ」

宿の仕事が終わると、いつの間にか夕方になっていた。アイリスは疲れたと思うと同時に、自分の力でやり遂げたんだというやりがいを感じていた。

自分の部屋に戻ろうと、階段を上り宿の2階へ行こうとする。踊り場で10歳くらいの金髪の少年とすれ違ったところ、少年はアイリスに声をかけた。

「もしかして、母さんと働いていたのはそこのお姉ちゃんだった?」
「そうね」

どうやら少年は昼に言っていたシェリーの息子のようであった。シェリーに明るい雰囲気がよく似ている。

妹のフリージアはアイリスを呼び捨てにしていたため、アイリスはお姉ちゃんと呼ばれるのを密かに嬉しく思った。

「どうりで見ない顔だと思ったなあ」

頭の上で手を組んで、何かを考えているような少年。

「私、昨日この村に来たばかりだもの」

「母さんが言ってた新しいお客さんだね! オレは、ジーオってんだ。まっ、これからよろしくね」

ジーオと名乗る少年は良くいえばフレンドリーに、悪く言えば馴れ馴れしくアイリスに話した。いつもこんなテンションなんだろうか。

「私は、アイリスよ」

「アイリスって言うのかあ! ……アイリスはさ、この村に来たってことは烙印、持ってるんだよね?」

「持ってるけど……」

アイリスはジーオに手を見せる。シェリーが言うには、彼も烙印を持っていたため躊躇いはなかった。

「オレもさ、烙印持ってるんだよね。だから、アイリスお姉ちゃんはオレ達の仲間なんだよ」

「え?」

オレ達、という言葉に村の人達のことを指していることはアイリ

スでもすぐに分かった。だけど、そこに行き着く前にとぼけたような声が出てしまっていた。

「知らないのかい？　ここの地下が烙印持ちの人々の秘密基地になつてゐるってことをさ」

「それは知ってるわ」

生意気なもの言いに少し気分が良くないと思ったためか、冷めすぎた態度にならないようににしても、ほんの少しだけつららのような物言いになった。アイリスでも、内心では子供相手に強がるのはどうかとも思っていた。だけど昔には妹とよくつまらないことで喧嘩していたな、なんてことを思い出して、生意気なのはしょうがないとも思える。

「……あつ、こんな所で長々と話しても良くないか。誰かが通れなくなったら困るしね。オレも夜は地下にいるから良かったら来てよ。じゃ、また後でね」

そんな言葉を残して、ジーオは一階に駆け下りていってしまった。それにしても、よくしゃべる子だというのがアイリスの印象であった。この饒舌ぶりはフリージアにそっくりだと思ひながら。こうも話したことがポンポンと出てくるのは、逆に尊敬できてしまう。アイリスにとって話したいと思つてることなんて、引き出しを掘り返すようにあれこれと探さないと見つからないものなのだから。

部屋に戻って少しだけ仮眠をとってから、アイリスは食堂に向かった。

階段を降り宿のロビーを通ると、誰かが軽く肩を叩くの気にづく。肩に触れた主を確かめようと振り向くと、アイリスは驚きのあまり、肩に力が入ってしまった。

「よっ」

その主はというと、悠々と軽く右手を上げて会釈した。ある程度予想は出来ていたが、やっぱりというか、エーベルだ。

「びっくりした。何が『よっ』よ」

彼も結構馴れ馴れしい部類に入るな、とアイリスは思った。ただ単に、同情心だけで関わっているのだろうけれども。

だから、馴れ馴れしい男はどうか。放っておこう、なんて意識では考えてみるけれど、無意識下ではその馴れ馴れしさに対抗したい気持ちでいっぱいであった。

「たまにはここに顔を出さなきゃな、なんて思ってたさ」

ずいぶんと久しぶりでありそうな答えをしながら、アイリスについて歩いているエーベル。

「用があるのは地下、でしょ？」

「分かってるじゃねえか」

「烙印を持った人達は、何をしているの？」

「簡単に言えば晩餐会みたいなもんだ。アイリスも、行くのか？」

「うん。……ちよつとは、見てみたい気もする。覗いてみる、くらいだけさ」

アイリスは過去に学校という人が集まる場所でいじめられていたこともあって、多くの人が集まる場所は苦手だった。だから躊躇する気持ちもまた、どこかにあった。

「そういえばお前、烙印持ってる連中のこと知らないのか」

「どんな人達なの？」

「色んな奴がいるさ。……まあ、実際会うまでの楽しみって所だな」

食堂の場所に着くと、厨房の入り口の前でシェリーが待っていた。

「あら、アイリスちゃん」

シェリーはアイリスの横を見ると、エーベルの存在に気づく。

「エーベル君も一緒だったのね。……珍しいわね、こんなに早くから来るなんて」

「気が向いたただけだ」

「どんな風の吹き回しかしら？」

「別になんとも。……でも、ちょっと人恋しくなった、って感じか？」

「ふふ、色々あったのね。エーベル君、堂々と女の子を連れてきたってのに、何があったのよ？」

シェリーはというと、ふたりを面白そうに眺めていた。

「ちよっと、軍に捕まっただけだ。こいつはたまたま同じ牢屋にいたからとりあえずここに案内してやっただけ」

「母さん、この扉開けていい？」

どこからかひよっこりと顔を出したのは、アイリスが階段で出会ったジーオだった。

「いいわよ。開けて頂戴」

厨房の入り口から向かって左の壁にジーオは左手を当てる。すると、ジーオの烙印は光り壁は扉となった。右側は厨房となっていて、料理人だか助手だかが何人か料理の仕込みをしていた。

「これでいいわね。さあ、どうぞ」

シェリーが壁から出来た扉に手をかけ、それを引くと、そこには緩やかな階段があった。思ったより小綺麗な感じである。

「ねえアイリスお姉ちゃん。オレが、ここの鍵をかけてるんだよ。すごいでしょ」

「……凄いわね」

えっへん、と胸を張るジーオに、驚きを隠せないアイリス。

どんな人に出会えるのだろうと、不安とほんの少しの期待が混じりながらアイリスは扉の中の下り階段に足を踏み入れたのだった。

2. 烙印と秘密の晩餐

厨房の脇にある扉に入りそこにある階段を通って、アイリス、エーベル、ジーオの3人は宿屋の地下に向かった。

地下は開けたばかりであったためか、人はいない。だが、明かりをつけるとそこには確かに1階の食堂のように、テーブルと椅子が並んでいた。

でも、違うのは地下の食堂のテーブルは丸テーブルであり、より周りの人と話しやすいようになっている。

彼らは奥の方にある、4人掛けの席に腰掛けた。

「ねえ、アイリスお姉ちゃん。どうしてここに隠し扉があるんだと思う？」

何かを企むような表情で、ジーオはアイリスに訪ねる。

「どうして？」

「すぐに答え言っちゃうとつままないな。エーベル兄さんに聞くのもなしだよ。だけど、ヒントなら出してあげる。それは勿論、『烙印』。分かったら、こっそりオレに教えてね」

「俺、知らないって」

笑顔で人差し指を立てるジーオに、わざとらしくエーベルは知らんぷりをする。そこで、アイリスは、ヒントを頼りに自力で考えてみた。多分、難しくはないはずだ。

「烙印？ ええと……………あっ！！」

「分かった？ オレに、こっそり教えて」

ジーオは片方の耳をアイリスの方に向ける。アイリスはこそこそ話をするように手を形作り、ジーオの小さな耳に向かって囁くことには、

「もしかして村が見つかった時に、烙印を持った人が隠れる、とか？」

「そうだよっ。よく分かってるね」

「なるほどね……」

「まあ、この村の事情を知ってるなら分かるよな」

アイリスの脇でエーベルは分かって当然、のような口調で言った。
「知らなかったら、分からないとでも？」

馬鹿にされたようで、少しだけアイリスは悔しくなった。

「分からない方がいいことだってあるのさ」

それはナージュ村のことだけでなく、他に含みを持っていたことにアイリスは気づかなかった。

「ところで、今日は誰が来るのかなあ」

ジオオはルンルンとした気分で、頬杖をつく。

「さあな。誰だっていいだろ」

大してエーベルは興味がなさそうだった。アイリスも、ここに来る人々がどんな人かは分からないので何とも思わなかったが、とりあえず優しくていい人だったらいいな、とだけ考えていた。

それから少しの間、3人はたわいもない話をする。話していたのは殆どジオオであったが、ジオオの話は子どもらしい無邪気なもので、人と話すのが苦手なアイリスでも何の疑いを持たない気持ちで聞くことが出来た。

「あっ。誰かの足音がするよ」

ジオオは階段を降りてくる人物に、真っ先に気がつく。

「えっ？」

「だってオレ、いつも最初にここに来てるもの」

背伸びをしているような感じにジオオは胸を張る。

階段から降りてきたのは、癖のある短めの髪をひとまとめにして結った赤い髪の女性だった。ヒールのある靴をはいているためか分りにくいのが、小柄であった。しかしスタイルは良く、体のラインがはっきりと分かるような服を着ている。

同じ赤毛でもエーベルやセリシアの髪は朱に近い色であるが彼女は赤紫、と言えるような色である。

「あら、見ない顔ね」

女性はアイリスと目を合わせた。

「は、はじめましてっ」

とりあえず挨拶してみた方がいいと思い、頭を下げて挨拶をするアイリス。

「そのあなた」

女性は厳しい顔つきでぴしゃりと言い放つ。

「はい？」

少しの間を置いて、言われたのは自分だと気づくとアイリスは座っている体制で女性の目を見た。

「うかつに、名前を名乗るんじゃないわ。私が敵だとも、限らないからね」

「あ……、は、はい」

なんとなく、厳しい人だなあとアイリスは思った。とりあえず、怒らせたくはないというのが印象であった。

「あなた、ここにいてことは烙印持ちね」

「え？」

何の迷いもなくきっぱりと言い放つ女性に、アイリスはほんの少しだけ戸惑った。

「とりあえず、はっきりして。私、曖昧な態度は嫌いな」

「はい。烙印は、あります」

アイリスは女性に烙印を見せた。そうすると、女性は手の甲をアイリスの方に向けて烙印を見せた。

「あなたを試してみたかっただけよ。正真正銘、烙印持ちのようね。私はロゼットよ。情報屋、やってるわ。さ、名前は？」

「アイリス、です」

「アイリスね。そこに一緒に座ってるエーベルにジオー、あんたたちは彼女と何の関係があるのかしら？」

アイリスに質問が終わったかと思えば、今度はエーベルとジオー

の番だったようだ。

「オレ達の宿に、泊めてるんだ。そこで、知り合ったって感じかな。」

「こいつをナージュ村に連れてきたのは俺だ。今は、そのよしみ、って感じだろ」

「ふうん。なかなか面白いわね。……ちよつといい、アイリス。エーベルはあれでいて結構モテるのよ。何でああいった女心に疎すぎる男がいいのか私にはちっとも理解できないけど、うかうかしてる和其他の子に盗られちゃうわよ」

エーベルはそれなりに背が高く、顔立ちもよく見れば整っている。しかし、アイリスにとってはそれだからどうかと言う話だ。

「……えっ？ あ、そういう訳じゃなくて……」

「ぼっちり聞こえてるぞ、ロゼット。あと、アイリスに変な事吹き込むな」

何かを言おうとしたアイリスに、エーベルが遮った。その時アイリスははっきり否定したいと思っていたが、こういった噂好きなタイプの人に意見を言うのは苦手なため言葉が出なかった、というのが実である。

「やあね。わざとよ、わざと。聞いている人が面白いと思う、俗っぽい情報はいつの時代も需要があるもの」

「……相変わらず喜んで嫌がらせをしているんだな」

「その困った顔を見るのも面白いのよ。さあ、そんな訳だから今日も飲むわよ！ ビール1瓶お願い！」

勝手に空いていた席に座ったロゼットは近くにいたウェイターに呼びかける。ジーオは勿論のことアイリスやエーベルも未成年であるため、お酒を飲むのはロゼットだけだ。

アイリスが話を聞くがてら周りを見渡していた時に気づいたのは、段々とこの空間にいる人が増えていき徐々に賑わいを増していくのは飛ぶように瞬間的なことであるということだった。

「酔っ払う前にアイリス、あなたに言っておきたいことがあるの」
ロゼットはアイリスに向かってつぶやく。

「あなたの烙印の力がどれほどのものか、明日見せて頂戴。明日の朝、宿屋で待ってるわ」

「俺が見るからには、結構強いもんだった」

「まっ！ そうなの？ エーベル。尚更見てみたくなったわ。この私が特訓してあげるから付き合いなさい、アイリス。エーベルも助手として手伝って？ いいわね？」

「あっ……はい」

「俺もかよ」

殆ど一方的な押し付けに、アイリスとエーベルは大人しく従うしかなかった。体力がないアイリスの心中には、嫌な予感しかない。

「ロゼットお姉様の修行、オレも受けたいです！」

退屈そうにしていたジーオはロゼットの目を見て、一言。

「ジーオ。いっくらお姉様って呼んだって、あなたには3年早いわよ。それまでに、ちゃんと体と心を鍛えておくことね」

「ちえっ。オレも、烙印の力を上手く使えるようになって強くなりたいのにな」

「時間なんて、いくらでもあるわよ」

「烙印の力で、烙印を嫌ってる軍を派手にやつつきたいのに……」

「どうやらジーオはまだヒーローに憧れていたようだ。」

「今は無理だな。でも、ジーオが大きくなったらその烙印の力で困ってる人々を助けてやれ。それだけは忘れるなよ」

ジーオの肩を軽く叩き、歯を出して笑顔で励ますエーベル。

「むう……っ」

「『この鍵をかけてるんでしょ？』」

まだ諦めきれないジーオに、アイリスは言った。

「それは、役に立ってることだと私は思う」

「でも……」

「出来ることからやっていけばいいんじゃないかな」

自分は、こんな気の利いた言葉が言えたんだ。そう思うと、アイリスの心は底からじんわりと暖かくなっていった。

でも、ジーオは黙ったままだ。言葉は聞こえたのかと、不安になる。

「……分かったよ。」

「えっ？」

「オレ、もっと強くなってみせるから、それまで待っててね」

その言葉を聞いた時、アイリスは誰かに感謝されるということがこんなにも嬉しいことだと気づかされた。人の悪意を恐れるばかりに人の好意をも回避してきた自分自身が、急に恥ずかしくなってきた。

「その前に俺達が何とかしてやるけどな」

エーベルが自信ありげに言い放つ。自分の言葉は意味をなさなくなった、とアイリスはあっけにとられる。

「エーベル、いつかはオレも、大活躍するんだから！！ ……それまで、とどめはささないでよー！」

「さしてやるさ」

「このっ！ エーベルの戦闘バカーっ！」

ジーオがパンチを入れようとする。大の大人がこういった場所では人を殴ったら大変なことになりそうだけれども、明らかにエーベルとジーオでは実力差がある。あっさりとジーオの腕は、エーベルの大きな手によってつかまれた。

「俺を殴れるようになってから言うんだな」

「うん、いつか殴れるようになってみせるよ」

アイリスはつくづく男の子の友情は不思議なものだと思った。だからといって女の子の上辺だけの友情が理解できる訳ではない。だから、本心を出した付き合いの方がいいとも考える。

「俺らも、何か食おうぜ」

エーベルにせかされて、アイリス達はメニューを見た。

地下だから分らないが、そろそろ日は落ちたのではないだろうか。ちょうど何かを口にしたい頃合であった。

「じゃ、魔術師が輝ける未来に向かって乾杯！」

「乾杯！」

ロゼットがビールの入ったジョッキを掲げる。それに合わせて、アイリス達はジュースが入ったグラスをコツンとひとつに合わせた。

「ロゼット姐さん、乾杯だ！」

いつの間にか、ロゼットの周りには酒を手にした人々が集まっていた。エーベルやジーオも、誰それ構わず乾杯している。

自分も乾杯するべきなのだろうかとアイリスは僅かに不安に思っている、自分のグラスが誰かのグラスと合わさった音に気がついた。

「アイリスちゃん、戸惑ってないで皆と乾杯してきなさい？」

それは、水の入ったグラスを持ったシェリーだった。彼女の隣には彼女の夫であろうか、ガタイが良く威勢がありそうな中年の男性が立っている。何回か宿屋で見たことはあったので、多分宿屋の関係者ではあると思っていたのだが。

「はは、それがいいだろうな。うちの宿屋に泊まってるんだったら、よろしく頼むぜ」

「は、はいっ」

こんな風にして、彼らの夜はふけていく。

アイリスはこういった場には不慣れではあるものの、ただ自分がこの場の一員であること自体が嬉しく思えたのである。

3. 修行と烙印の力

次の日のこと、アイリスは早めに起きて表に出ようとした。というのも、ロゼットから烙印の修行に呼び出されているからだ。

ロゼットとは前日の夜、宿の地下の夕食会で出会ったばかりだ。しかし、アイリスはロゼットの人物には少し苦手意識を持っていた。だから、遅れてきて何か言われるのを恐れて早めに待っている。

もつとも、修行自体にも恐れを抱いているのだが。

「あら、早いのね」

アイリスが難しい顔をしながら周りをうろろしていると、当のロゼットが宿に近づいてきた。

「……あ、おはようございます」

「こんな早くからいるってことは、修行を楽しみにしていたのかしら？」

彼女はアイリスの顔をまじまじと覗きこむ。

「いえ、そういう訳ではなくて……」

「だったら、今から始めちゃうわよ？」

「遠慮、しておきます」

「そういうえば、助手は来てないしねえ。時間までは、待ってあげますか」

時間になってもエーベルが来なかったら、時間に始めるといふことだろう。

それから、アイリスとロゼットはしばらくエーベルがこちらにやってくるのを待っていた。ようやくエーベルが宿の玄関に姿を現すと、アイリスはセリシアと一緒にいるのに気がついた。嬉しいと思いつながらも、かすかに疑問を覚えるアイリス。

「あれ？ セリシアはどうしてここに？」

「あたしは、ただの傍観客だよ。……兄貴の話を聞いて、行ってみたくなったんだ。それに、いつまで経っても起きそうにない兄貴を起こしてここに引っ張り出したのもあたし。」

「全く、言わなくていい事もめちゃくちゃしゃべりやがって。情けなく見えるからやめろ」

寝ぼけたままでセリシアに引っ張り出されるエーベルが容易く想像できてしまい、アイリスは笑いがこらえきれなかった。隣では、ロゼットが腹を抱えている。

「おい、ロゼットもアイリスも笑うなよ」

「ふふっ……はあ。そりゃ、笑えるわよ、アイリス。いい物想像できたと思いなさい」

「確かに面白かった、ですけど……」

こんなたわいのない話の中身は時の流れとともに流れ、忘れ去ってしまうだろう。しかし、このありふれた平和なひとときの瞬間はアイリスにとってはいままで想像することすら出来なかったことなのだ。だから、この場所に居られ、溶け込められるきっかけを作ったエーベルやセリシアには心のどこかで感謝の思いを感じながら、アイリスは小さな幸せをぎゅっとかみしめていた。

「じゃ、私の考えた修行のメニューに入るわ。まずはランニングで、体力つけるのよ!」

「私、体力には自信がまるでないんですけど……」

烙印の力を使うための修行なのに、ランニングなんて。そう思ったアイリスは、つい初めから弱音を吐いてしまった。

「こらっ! 弱音を吐いたら走れるものも走れなくなるわ。コースは、ナージュ村一周よ! セリシアはアイリスと道案内を兼ねて一緒に走って、エーベルはコースの真ん中、西集落あたりで待機。私はゴールで待ってるから、走ってらっしゃい!!」

「は、はいっ」

何か言うともたロゼットのやじが飛んできそうな気がして、アイ

リスはとりあえず大人しく従っておいた。セリシアと一緒に走ってくれるというのが、何より幸いであった。

「じゃ、あたし一緒に走るからよろしくな」

「しばらく経ったら、ひとりで走ってもらおうからね」

微笑むセリシアと、先のことを忠告するロゼット。

ロゼットさんは走らなくていいのだろうか？　なんてアイリスは思ったのであるが、彼女もどこかでトレーニングに打ち込んでいるのだろう。彼女の言葉には、どこか説得力が感じられた。

ナージュ村の街道を蹴って、アイリスとセリシアは走り進めていった。

「なあアイリス、黙ったままで走るのも辛気くさいからさ。何か話しながら走ろうか？」

前を走るセリシアが振り返り、

「それだと、疲れちゃわない？」

「アイリスが黙って走りたいならそれでもいいけどさ。でも、喋りながら走ったほうが楽しいぞ」

「そうだね。でも、何を話すの？　……私、世間話が苦手だし、こんな時って何を話せばいいか解らないの」

「今日は暑いね、なんてことじゃつまらないだろうな。じゃ、こんなのはどうだい？　未来のこととか、さ」

「未来？」

「そう、未来。アイリスも、未来に思い描いている理想があるんじゃないかな」

アイリスの目には、この兄妹はどこまでも前向きに見えた。自分みたいに過去に囚われないで、今を懸命に生きながらも未来をしっかりと見据えるその彼らの目は光輝き、価値あるもののようにだった。「理想なんて、ばかばかしく思っていた。でも、私の理想、セリシアには話してもいいかも」

「本当か？　なら、アイリスの理想、あたしに教えてくれよ」

「それはね……、」

言葉を交わしながら、一步一步進んでいくアイリスとセリシア。彼女たちは足から鳴る齒切れのいい音とともに、様々な道を通り過ぎていった。

「あら、お帰りなさい。遅かったわね」

もとの場所である宿屋の前では、脚を組みながらロゼットが待っていた。

「途中で、エーベルには会ったわよね？」

「はい」

「じゃ、近道はしてないわね。じきに帰ってくると思うから、しばしの間は休憩していいわ」

地べたにへたり込んで、アイリスは休みにほっとする。嫌な時ほど時は流れないと言うけれども、何故か時はいつの間にか過ぎていたように見受けられた。

「疲れたか？」

「うん、疲れた。でも、不思議と辛くは……感じないかな」

「はい、タオル。あたしよりずっと汗かいてるじゃないか。遠慮なく使っていいぞ」

「ありがとう」

セリシアは困らないのだろうか、差し出されたタオルを使うことを少し躊躇うアイリス。

「でも、私が先に使って汗臭くならないかな？」

「そんなこと言わないでさ、あたしに感謝して遠慮なく使っちゃいなさいって」

「いいの？」

セリシアは大きく頷く。それに安心したのか、アイリスはその明るい色のタオルを存分に使って体中を拭いていた。

「あっさり、存分に使ってるじゃないか」

「え……？ 私ってばいつの間に!？」

ふと動かしていた腕を止め、アイリスは今気付いたと言うような風合いでタオルを握りしめる。

「その方が、貸したあたしとしても嬉しいよ」

（あいつは楽しそうなことだし、セリシアがいた甲斐があったな）
ひとり離れたところで、こっそりと宿屋に戻ってきたエーベルは空を見上げながら考えていた。肩にかかる程の伸ばしっぱなしの赤い髪が、風のなすがままになびいている。

「あら、いたのね。何ぼんやりしちゃっているのよ？ アンタらしくもないわよ」

そんな彼に、ロゼットは声をかけた。

「そんな事もねえよ。俺だって時々、頭冷やしていたいものだからな」

「あつそう。もうすぐ続きにするから、そのつもりでなさい」

「分かってる」

（……俺はこんな風に何も出来ずに立ち尽くしていて、無力なんだろうか？）

青年の考えは、途方の彼方へと旅を始めるように空へと消えていった。

「じゃ、修行の本筋に入るわね。アイリス、あなたはその烙印で、どんな力を使えるのかしら？ ちょっと、私に見せてごらんなさい」

「あっ……はい」

アイリスは一瞬だけ瞳を閉じて、集中力を左手の烙印に向けようとする。

手が光りだす。

すると、どこからともなく二つ、三つと親指程の大きさの雪の結晶が現れ始めた。

「きれいだな……」

セリシアは、初めて見る大きさの雪の結晶にただ感嘆のため息を

漏らしている。

結晶は、さらに数を増やし始めた。

夏ならば涼しげに見えただろうが、今は秋であるので、早くも冬が訪れたようにも捉えられる。

「ふうん……。雪の力、なのね。でも、まだ力を十分に出しきっていないように見えるわ」

ロゼットは感動も何もない、といったような様子で感想を漏らす。

「アイリス、まだ余力はあるのかしら？ 正直に、お願いよ」

「……まだ、大丈夫です」

「ふんふん」

やっぱり、と言うようにロゼットは頷く。それを、報告するような形でエーベルに話した。

「この程度で終わる烙印持ちもいることだし、あなたが見込んだ通りね、エーベル」

「ああ。だが、こいつの能力はまだ、分からない所も多い」

「要するに、とりあえず基礎能力は高いのに、使い方はよく分かってない。扱い方次第ではどんな可能性もある、そういった所かしら？」

「そうだな」

「じゃ、実戦の訓練、やっちゃうの？」

「その方がいいだろう。烙印を持っている限り、俺達烙印持ちはまた厄介事に巻き込まれる可能性は否めない。使えるものだったら、使った方がいい」

「やっぱりそんな考えなのね。あなたがずっと烙印の力を使って戦っていて、セリシアもそれを支えているのは知ってるけど、戦いなんて言葉に無縁な女の子の気持ちも一応考えてほしいものね」

「……あいにく俺は、優しくなんてないからな」

どこか悲しげな様子で、エーベルが呟いた。

（そういえば私は、今までは何もしてなかったとはいえ、烙印の力

を使って戦いに身を投げ出すなんて、考えてもいなかった。それは、怖い?」

アイリスは自分自身に問う。

(そりゃ、やっぱ怖い。……きっと足手まといになるのは間違いない。だけど、エーベルは私みたいな人を探し続けていた。、また何かあって軍に見つかったとしたら? そしたら、今度は命は保証されてない。私は、どうすればいいのだろう……)

「何か悩んでるのかい、アイリス?」

「私の話は、嫌だった? ……そりゃ、聞いてて気持ちのいいものではないわよね」

セリシアに腕を掴まれてアイリスは我に返り、目を見開く。「私

……」

「ん?」

「……嫌って訳じゃないけれど、でもまだ、気持ちの整理はできてないんです」

それは嘘でもあり、本当でもあった。

これが、迷いという感情。

何かに迷うという経験を、ずっとしばらく持っていなかったアイリスにとっては、非常に不思議で、悩ましいもの。

「まあ、いろいろあったみたいだしな……」

セリシアは考えたが、言葉よりも一つの行動によって示した方がいいだろうと思った。

アイリスの手が、手によってそっと包まれる。

これが、セリシアの行き着いた結論だった。

それに驚いたアイリスは一瞬肩を上げたが、しばらくすると落ちて着いて、穏やかな表情になった。

セリシアの手の温もりが、肌を通じて伝わってくる。今日は軽装で手袋をしていないらしく、尚更暖かく感じた。

人に触れることを恐れるアイリスは、容易く自分に触れてくれたセリシアを純粹にすごいと思っていた。

「こうすれば、気持ちは楽になるんだ。……どうかな!？」

「ありがと。少しは、楽になった。後で落ち着いて、考えてみるね」
「言葉よりも、簡単かなって思っただけさ」

「ううん、そんな簡単には思えない。私は言葉しか言えなくて、しかもその言葉でも思いもしないことを言っちゃったりする。……すごいよ、セリシアは」

「そんなふうに言われたのは初めてだな。なんか照れるけど、嬉しいよ」

腕を自分の後頭部を回し、はにかむセリシア。それにつられて、アイリスも微笑んだ。

「ほらっ、笑えた」

「うん、笑えた。……私、ちょっとだけ考えたよ」

輝きを少しだけ取り戻した目で、アイリスは見つめる。

「何を？」

「これはロゼットさんやエーベルに言うべきだと思うけど、私、強くなりたかった」

「いい心構えね」

いつの間に、ロゼットは二人の前に立っていた。

「とりあえず、修行の続き、やってみます。後はそれからです」

「それが聞きたかったのよ」

「お前がそう言うなら、俺も手伝ってやる」

エーベルも輪に加わる。

「私は、弱いままだったから。だから、どうにもならないままだったのね」

4. 戦いに向けて

自信に満ちた表情のエーベルと、不安げな表情のアイリス。対照的な彼らは、来るべき時の為に実践的な特訓をしようとしていたのだった。

「じゃ俺、かなり手加減するつもりだからよろしくな」

「そうじゃないと、私が動く余地はないもの……」

「そろそろ始めてもいいかしら？」

一向に実戦の練習を始めようとしなないアイリスとエーベルを急かすようにロゼットは諭した。

「ううっ、いざとなるとちょっと怖くなってきました」

アイリスは正直、まだ烙印の力を使うことに抵抗がない訳ではなかった。

「誰だってそうよ。でも強がって無茶する奴らがここに約二名いるけどね」

ロゼットは励ます様子ではある、が。

「それって誰だよ」

「あたしも入っているのか？」

その二名――アルギート兄妹とはいうと自覚はあまりないようであつた。

ふたりとも堂々としている、とアイリスは思ったものの。

「そうよ。セリシアなんていつぶっ倒れるか分からないもの」

「そんなにあたし、倒れてたか？」

ロゼットの補足を余計そうにするセリシア。

「倒れてた。お前を連れて帰るにも一苦労だったからな、俺はよく覚えてる」

「兄貴もよく怪我して帰ってくるくせに」

「俺は俺なんだよ。自分の面倒は自分で見られる」

「そろそろ始めるの？」

場に入りきれずにいたアイリスは、待ちくたびれた子供のように話に割り込んだ。

「ああ」

「といっても、初めは敷居を低くしてあげて頂戴よね」

ロゼットが、さらにそこに割り込む。

緊張感は、少しだけ薄れてきたような気がした。緊迫感がなくなりつつあるのも問題だが。

「じゃあ、今度こそ本当に始めるぞ」

「お、お手柔らかにお願いしますね!」

言葉がしどろもどろになってしまった。

やっぱり、緊張しているんだ。

「ほら、危ねえぞ。こっちによけてどうする!」

「とっさに判断する、なんて難しいよ……」

特訓が始まった。

まずはエーベルが烙印によって光を出し、それをとっさに避けられる反応力を見る、というもの。仮想敵とした軍人は烙印こそ持たないもの、ナイフを何本も持ち合わせている。彼らの攻撃を予測するために、反射神経を鍛えることがまずの目標であった。

エーベルは術を使いこなせるようにする方が早いと主張したが、ロゼットがそれならあまりに実戦的な経験がなさすぎると困る、と言いくるめたのだ。「確かにそっちの方が正論かもな」と、エーベルも素直に認めたのであった。

「体中なんかぴりぴりする……」

「まだまだだ。軍の奴らはこんなに甘くはない。それに奴らが使ってくるのは刃物とか銃器とかだからな、当たったらひとたまりもないぞ」

「それなら今の球のほうが全然マシ……」

彼が放った光は相当弱いものではあるものの、アイリスはまともに食らい続けていたためにその影響を受けていたのであった。

「運動苦手とは聞いたが、まさかこんなに鈍いとは思わなかったぞ？」

「鈍くて悪かったねっ」

取りたいものがなかなか取れないでいる時のような表情をアイリスは浮かべる。エーベルも、アイリスのとっさの判断力があまりに欠けていることに呆れた様子だった。

アイリスは、必死に言い訳を続ける。

「大体、自分からまともに運動したことないんだから」

「……そうか。いい暮らししてきたんだな」

それにエーベルは言い返した訳ではないが、皮肉めいた口ぶりで答えた。

確かエーベルは昔、セリシアの面倒を見ながらずっと旅をしていたんだっけ。

そのことを思い出すと、アイリスはまた申し訳ないことを言ってしまった、という気持ちになった。

「あっ、……ごめん」

「何謝ってるんだよ？」

とりあえず謝ってはみたものの、当のエーベルはどうして謝っているのかは分からないようだった。もしかして、無自覚だった？

「さっきの、失言だったかなって」

一応、アイリスは弁解してみる。

「それぐらい気にするな。……えっと、反射神経伸ばすには何すればいいんだっけ……」

どうやら、アイリスの気にしすぎのようだった。エーベルは、それよりもアイリスの反射神経について気にしていた。コーチの風格が現れてきている。

「兄貴のその光の球、もっとゆっくりできないのか？」

手に口を当て、真剣な表情で考えるエーベルに、セリシアはこう提案した。

「できないはないけど、……それだけでいいのかよ？」

「アイリスが上手く避けられるようになったらどんどん早くしていくって訳ね。よく分かったわね、セリシア」

至ってシンプルな意見に疑問を覚えるエーベルとは対照に、一瞬にしてロゼットはその続きまで見通していた。

「いや、見てても速いと思ったんだよな。戦うのとは違うんだぞ、兄貴」

セリシアはぴしゃりと言い放つ。

「わり。つい、戦いの癖で」

「兄貴って何かを教えるの上手い筈なのにな……。何か抜け落ちてるというか、周りを見てないというか」

「そうなの？」

はあ、と頭を抱えるセリシアに、アイリスは首を傾げた。

「何気に兄貴、面倒見いいいな」

「そうね。じゃないと誰も私の面倒なんて見ないよ」

「アイリス」

突然、セリシアの声の調子が変わった。

「何？」

何か間違ったことでも言ったかな、とアイリスは思う。

「自分をもっと大切にしてくれ」

「以下同文」

エーベルもセリシアに同調した。

「馬鹿な話はそこそこにして、早く続きを始めなさい」

そこにロゼットが催促する。「そうだな。これが休憩ってことで」

「えっ？ まだ疲れとれてないよ？」

休憩時間にしては少くないか、とエーベルにアイリスは反論した。まだ、三分も経ってなさそうであるのに。

「万全になるまで待つと日が暮れるだろ」

アイリス達は特訓を再開した。

「この調子だ」

アイリスはトレーニングを段階的に進めることで、ある程度球の速さを速くしても大分よけられるようになっていた。

途中、昼食のための休憩を挟んだものの、その他の時間は特訓が続けられていた。

「少しは反射神経ついたかしら？」

「多分な。よくやったと思うぜ」

「あっ、そ、そう！ それは、有り難いことですね！」

アイリスがお礼を言おうとしても、また言葉がおかしくなるばかりだった。

「どうしたんだよ？」

「な、何でもないから」

日は今にも地平線の下に沈もうとしている。

こんな時間までよく頑張ったなあと、アイリスは自分を誉めてみたくなった。

「すごいかも、自分」

「やったじゃないか、アイリス」

「びっくりした……」

「見ていて、あたしもすごく進歩したと思ったからな」

心に留めておくだけの独り言の筈だったのに、セリシアが背中を押している。つい、口に出してしまったようだった。

「じゃあ、今日はこれで終わりよ」

「ロゼットさん。それにエーベルにセリシア。今日は、本当にありがとうございました！」

「また私が暇なときやるわ。もっとキツくするつもりだから覚悟しておきなさい！」

そう言い捨てて、手を振って、ロゼットは去っていった。

「全く、勝手にも程があるよな。人は散々こき使うし」

ロゼットがいなくなったのをいいことにエーベルがぼやく。

「私としては、厳しかったけど、役に立ったかな」

「兄貴は体力あるしな、いいんだよ」

それに対してアイリスは素直にロゼットの味方をし、セリシアは兄に非があると言う。

「セリシア、だったらお前が身の程わきまえろ」

「そうだよな。わきまえろって言われてわきまえられたらいいんだけどな」

「無理は禁物だと思うよ」

「アイリスまで！」

「じゃ、俺達も帰るか」

「途中まで送っていくぞ」

三人は歩みを進めて、それぞれの帰るべき場所に向けて進んでゆく。

背景に映る夕日は、オレンジを散らしたように輝いていた。

1. 突然の旅の話

アイリスがナージュ村に世話になることになってから、すでに二週間が過ぎていた。宿屋での仕事も、烙印の修行も、アイリスはごく当たり前の日課のようなことと思いついた頃合いである。

さらに、ナージュ村にこうも早く馴染めるようになったことも、アイリスにとっては驚かすにはいられないことであった。

そう、ほんの前まではずっと家で引きこもっていたのが今では昔の話のようだ。寧ろ引きこもってた自分がバカじゃないのか、とも考えてみることもあった。

けれど、ナージュ村が烙印を受け入れているからこそ、自分も受け入れられている。それに引きこもってなかったら周りの目は痛いままだっただろう。ナージュ村の人を信じようとしてもまだまだ人を信じきれない所があつて、自分は一步引いた態度で人に接してしまふけれども。

夕方の宿屋地下。

今日もここでは、烙印所持者のための晩餐会が開かれる。

アイリスがこの晩餐会に来たのは、二度目だった。まだ人もまばらである頃合いに、6人掛けの丸テーブルに、アイリスは頬杖をついてひとりぼんやりとしていた。

やはり、新入りとして近寄りがたいオーラが放たれているのだろうか。アイリスの周りには、人が集まる気配は微塵もなかった。

このまま部屋に戻ろうかな、とも考えた所に、赤毛の少女の姿を見つける。アイリスは彼女に向かって、控えめに手を振ってみた。

少女は手を振り返す。伝わった、と思うとアイリスは自然に笑顔になった。けれども、アイリスの心の中にはちよつとした疑問があ

った。

「セリシア。烙印持っていないのに、どうしてここへ？」

「烙印持っていない人が来ちゃいけないって訳じゃないさ。まあ、確かに前は行かなかったけどな。兄貴も来てるぞ。後ろにな」

セリシアの背後をよく見ると、エーベルが壁に背をもたれかけて立っていた。その姿が何というか、様になっている。

「ど、どうも」

「ああ、アイリス、来てたのか」

セリシアとは比較的打ち解けたような気もするが、エーベルと話そうと思っても自分からは上手く話せなかった。

男女の違いというものもあるだろうが、どうしてこんなに素直になれなかったり引きつっちゃったりしちゃうんだろうと考えずにはられない。

けれど、アイリスはこの兄妹と共に過ごす時間を心地よく思っていた。

烙印を持つ人々への差別をなくすために、何が出来るか考えている兄。烙印を持たないながらも、兄の考えに賛同し、見守っている妹。そんな彼らは、烙印を持っている仲間としてアイリスを受け入れてくれていた。

ちっともいいところなんてない私と関わってくれているなんて、きつと、どうしようもないくらいにお人好しなんだろうーそんな風にアイリスが考えていた時、

「で、何ぼーっとしてんだよ？」

とのエーベルの一言に、我に帰る。

「何でもない」

「なら、いいけどさ」

「あら皆さん、こんばんは」

エーベルの声を遮って現れたのはロゼットだった。

彼女は低い背をカモフラージュするためのヒールの高いブーツをカツカツと鳴らして三人の方へと向かう。

「げっ」

突然現れたロゼットに顔を引きつらせるエーベル。流石のエーベルでも、彼女に頭が上がない様子をアイリスは何度となく目にしてきたので苦手なんだろうな、と考えた。

「今日は皆に大事なお話があるのよね」

何かを企むような表情で呟くロゼット。

「ああ、やっぱりそう来たか」

分かりきっているように達観したようなエーベルに、アイリスは首を傾げた。

「……やれやれ。エーベルは何も言っていないのね」

「へ？」

アイリスはエーベルの方に首を向けて、何を言ってるのか、とそれとなく目で伝えてみる。

「アインやフィルツとも相談してみたのだけれど、軍を調査するなら早めの方がいいわ」

「だよな」

「だから準備は早めにしておいた方がいいと思うの」

エーベルに自分の疑問が伝わるはずもなく、彼はロゼットとアイリスが入り込む余地がないような話をした。

「当然、アイリスも連れて行くつもりよね？」

「ああ」

自分の名前が出てきて、アイリスはとっさに目を見開いた。

「私、調査も、何が何だか分からない」

自分は一体どうなるのか、と不安になりかけた所で、アイリスは口を挟んでしまった。

「何も、強い烙印持ち集めて、軍が何故烙印を取り締まったりいち出張ったりしてるのかという内部のことを調査するんだ。俺、前に仕事手伝ってもらって言ってなかったっけ？」

「それは、聞いてたけど」

エーベルの解説に前、彼が仕事を手伝って欲しいと言っていたことを思い出す。決して楽なものではないと思っていたが、よりにもよって軍がらみだとは。普通に予想できていたことだが。

「また、捕まっちゃったりしないの？」

アイリスは恐る恐る聞いてみる。

「今回は団体で行くつもりだから軍の奴らも抑えられる筈だけどな、捕まる可能性がないわけじゃない」

エーベルは真剣な目つきで答えた。

「そっか……」

予想できていた答えにアイリスは肩をすくめた。

どうせ今ここにいることが奇跡に近いようなことなのだし、覚悟を決めなくては、とアイリスが思い始めたその時。

「でも」

エーベルの話はまだ続くようだった。

「何？」

「女——しかもガキ置いて俺だけ逃げ出すなんてできねーよ。だから万が一あったら何でもして、お前を逃がしてやるさ」

自分の頭をくしゃりと掻きながら、エーベルは照れくさそうに言った。

アイリスは、でもそれだとエーベルが困るんじゃないかな？　とも思ったが、

「ありがと……」

と素直に礼を述べることにできなかった。

何故か少し照れくさくて、アイリスの顔は上がらないままだった。「お前さ、時々素直なんだか素直じゃないんだか分かんなくなる時あるよな」

「えっ!？」

不意をつかれたエーベルの発言に、アイリスはとっさに顔をあげ

て目を見開く。

全然素直じゃないし、心はすっごく冷たいのに。エーベルは何が言いたいのだろうと思った。

「ホントはさ、素直なんだと思うよ」

「セ、セリシアまで何言うの!」

「話したら普通に笑ったりすねたりするし、なあ?」

顔を真っ赤にするアイリスに、セリシアはけらけらと笑いながら答える。

「……そうだな」

その少女二人の様子にエーベルは微笑を浮かべた。

「ちょっと皆さん、話が逸れているわよ。本題に戻りましょ」

とその時、ロゼットが間に挟む。

三人はロゼットに注目した。

「私達烙印持ちで、軍について、烙印について調べるって目的で旅に出るの。同行を許可するのは、私達が烙印の実力を知っている人だけ」

「ってことはあたしは……」

ロゼットの話が終わる前に、セリシアが遮った。

「当然、お留守番」

それをあっさりとロゼットは切り捨てる。

「やっぱりな……」

烙印を持たないセリシアは、そもそも烙印持ちのいざこざに巻き込まれる必要はない。しかし彼女は、兄を始め、烙印を持つ人々とずっと関わりを持ってきているために彼らと同じ程に烙印持ちの現状を変えたいと願っているのだろう。

それに、アイリスはセリシアに何度も支えられている。男の子らしい言動の中にも細やかな気遣いがあったりして、いつの間にか心を温かくしてくれていると感じられた。

「……セリシアも行きたいの?」

迷いながらも、アイリスはおずおずとセリシアに聞いてみる。

「そうだけどな。でも、止められてるならいいんだよ。……兄貴も君も心配だけど」

「でも私はね、セリシアがいてくれると、……えっと、助かるんだ」
アイリスは言葉を選びながら素直に思いを打ち明ける。

その一言を口にできたことに、胸をなで下ろした。

「気持ち嬉しいけど……。ところで兄貴はどうなんだよ？」

「お前がいてくれた方が、アイリスも気が楽だと思うぜ？」

「年、近いしねえ……。若いっていいわよね」

エーベルの隣で、ロゼットが羨ましそう（恨めしいとも言う）に皮肉を漏らしていた。

「いやいや。ロゼットはあたしなんかよりも全然美人だよ」

「まあ、嬉しい！ ……でも話は別よ。烙印持ちを何人も動員しなきゃならないほどだから、甘くはないわ」

セリシアは素で褒めたのであろうが、ロゼットはそれとこれとは別、と割り切る。

「あたし、雑用でも何でもするから。烙印を持ってないからこそ、できることをしたいんだ。足手まといにならないようには努力するさ！ それに、甘くない世界なのだったらアイリスの方がよっぽど心配だよ。……だからこの通り、お願いします！！」

セリシアは長いポニーテールの頭を下げて、ロゼットに頼み込んだ。

その様子に、アイリスは胸を打たれるような感覚を持った。寧ろセリシア自身よりも足手まといになるんじゃないか、と思えてくる自分を本気で心配してくれていることにも。

「烙印を持ってないから出来ること、ね……。」

ロゼットは少しの間考えてから、

「……あまり気に乗らないのだけど、仕方ないわね。旅立つメンバ

「の了承を得てからよ」

と、やれやれといった表情で一息ついた。

「本当か!？」

それでも同行できるかもしれないと思うと嬉しくて仕方がないのか、セリシアはご褒美をもらった子供のように声を張り上げる。

「まあ、焦らないことね。完璧に同行を許可した訳じゃないから」
「分かってるって」

「良かったね、セリシア」

「ああ。……もし一緒に旅立てたなら、その時は沢山話そうな、アイリス!」

「……うん!」

アイリスはセリシアと一緒にに行けるかもしれないと思うと、不安な気持ちも少なくなっていた。

ただ心配だったのは、運動音痴な自分が果たしていざ烙印を使つて戦うのに役に立てるのか、ということだけだった。

2. 旅立ち、そして調査へ

ロゼットが軍の調査の話をした後、アイリス達は宿の地下の広間に集まって打ち合わせを何度も重ねた。

話し合いの中では、上手く情報を持ち帰るにはどうしたらいいか作戦を練ったり、地図を広げて進むべき道を確認したりもした。

そして、軍の調査へと旅立つ前夜、宿の地下での最終会議が終わった頃。

「お疲れさん。皆、明日に向けてしっかり休めよ」

アイン・グランデが解散間際にこう言って、前日の会議は締めくくられた。

彼は若者ばかりの調査隊の中では最年長の、壮年の男性だった。

彼は良識的な大人で、一行の話し合いは彼のお陰で建設的なものになっていった。

「いよいよ明日だな、アイリス」

「うん、そうだね……」

調査に出かけるメンバーの中で唯一烙印を持たないセリシアだが、彼女は積極的に発言したりとかなり気合いを入れている。

それとは対称的に、アイリスは不安をなかなか消すことが出来ずに虚ろな気分が続いていた。

「セリシア」

「何だ？」

階段を登ろうとした所、セリシアは理知的な青年に呼び止められた。

彼はフィルツ・ジェノン。ナージュ村で医師を志す青年だ。

何かあったときに頼りになるし、それに彼の烙印の通信能力は便利になるだろうというロゼットの判断から、一行に加わった。

エーベルと同じ年のようであったが、落ち着きがあり、彼よりも

大人びた印象だった。

気難しい性格のようであるものの、アイリスが見る限りではエーベルやセリシアとは上手くやっていっているようだ。

「君は烙印を持っていないのだから、くれぐれも妙な行動は起こすんじゃないぞ」

……もつとも、セリシアを気にし過ぎている様子はあるものの。

「もう、フィルツは心配性だな。あたしは兄貴の妹なんだから大丈夫だって」

「その兄貴も無謀すぎるから困るんだ！ ……いったいどれだけ怪我をすれば気が済むんだか」

「呼んだか、フィルツ？」

フィルツの小言に、皮肉混じりで答えるエーベル。

「エーベル！？ さっきの話、聞いてましたね？」

一瞬うろたえたようではあるものの、フィルツはすぐに冷静さを取り戻して忠告を続けた。

「俺もセリシアも、そんなに無謀かよ」

「無謀じゃないよな、アイリス？」

アイリスはしばらく黙ってフィルツ達の様子を観察していたが、赤毛兄妹二人に迫られると思わず固まってしまった。

「……無謀かも。エーベルは脱獄なんて言い出すし」

沈黙、時間が止められたかのような空気の中。何か言ったほうがいいのかも、とアイリスは思い、正直なところを告げた。

「アイリスの言うとおりですよ」

「アイリスまで何言ってやがるんだ」

「あたし、見損なっちゃったよ」

「そ、そんなあ……」

「……って、冗談だって分かんないか？」

エーベルとセリシアに本気で咎められたと思い落ち込むアイリスを察したのか、セリシアは呆れて笑い出した。

「……昔から冗談通じない子だって言われた覚えがあるかも」

「お前ら、あんまりはしゃぎすぎるんじゃないぞ？」

「後でへばっても知らないわよ！」

そこにアインとロゼット、大人二人の忠告。

若者四人はロゼットを怒らせないように大人しく従う他なかったのだった。

「それじゃ、邪魔したな、アレス。またここで一杯やれることを祈ってる」

「おう！ 無事に帰ってくることだな！」

一行は階段を上る。ロビーでアインが夜まで事務作業をしていた宿屋の主人、アレスに声をかけて、解散となった。

「おやすみ、アリス」

「おやすみなさい」

セリシアと夜の挨拶を交わして、アリスは自室へと戻っていたのだった。

（やっぱり、眠れなさそう……）

アリスは真夜中の部屋で一人、布団を抱えていた。

ベッドの中で体勢をもぞもぞころころと変えているものの、それも効果がない。

自らの熱で布団は温まり、布団の中は暑くなっていくばかりで、さらに眠るには難しくなっていた。

少し外に出たほうがいいかも、とアリスは思った。暗い部屋の中、手持ちランプを手探りで手に取ってそれに火を灯す。いつもよりも外が明るいような感じはしたもの、念のためにランプは持って行ったほうがいいような気がした。

流石に寝巻きのままで表に出るわけにはいかないため、ナージュ村でいつも着ているような白いワンピースと青い羽織物に着替えて外に出た。

アイリスは自室がある二階から階段を降りて、ロビーへと向かうとする。

その時、明かりはロビーについていたことに気がついた。

「あれ、なんでアイリスお姉ちゃん起きてきたの？」

ロビーのソファには宿屋の息子の少年、ジーオが座っている。

何やら手作業をしていたようで、はさみやら布やら紙やら小枝やら、本当にいろいろなものがテーブルに散乱していた。

「ジーオこそ、寝る時間じゃない？」

「オレは、今起きてなきゃいけないんだよ！」

「どうして？」

アイリスはテーブルに転がっている品々に目が入った。

「あっ！ それはっ……。……。へへ、ばれちゃったか」

夜更かししている理由はこれらにあるのかとアイリスは思った。

ジーオはそれに気がつくと思死になって隠そうとしたが、かえって逆効果だった。

「その散らかしてあるもの？」

「そうだよ。オレは旅に出るアイリス達のために、夜なべしてお守りを作っているところだったの！」

「そうなの？ ……ありがとう」

「だってオレ、一緒に行けないし」

「そうだよ。ジーオも行きたかったのでしょうか？」

「あったりまえだ。……。だから、オレの分まで頑張ってくれよな」

「うん。……。私、不安でいっぱい頑張って頑張るって気持ちになれなかった」

ジーオの健気さに、アイリスの心はかすかに震えた。黒い霧のような、もやもやした気分が少しだけ晴れたような気がした。

そして、わずかな沈黙。

「しっかしさー。エーベルもロゼットも容赦ないよな。眠れないほど不安なアイリスを連れてって子供だからってこのオレは置いてって」

すぐに口を開いたジーオは何を言うのかと思うと、不満をこぼしていた。

その裏には、確信はないけれども、彼なりに元気づけようとする心がかいま見えたような気もした。

「そんな所もあるけど、私は彼らに感謝している」

「そうなん？」

ジーオはきよんとする。

「……エーベルがいなかったら、私はここにいないかもしれないなかったから」

「何それ？」

「私は彼に命を助けられた。ただ、それだけ」

「……アイリス、死ぬような目にあったの？」

「そんなところ」

「……もういいよ。とにかく、無事に帰ってきてね」

これ以上話すと重くなりそうだったために、ジーオはさっさと話を切り上げた。

「あっ！ お守りのことは、出発まで他の奴には内緒にしといてよ」
思い出したように、ジーオが慌てて付け足す。

「うん。約束する」

どんなものかは知らないが、一生懸命にお守りを作っているジーオの姿が微笑ましくて、アイリスの頬は柔らかく緩んだ。

「ぜったい明日までに作るから、待っててよね！」

「あまり遅くまで起きないことね」

別れの挨拶をしてからテーブルに置いてあった自分のランプを手にとって、アイリスは部屋に戻っていった。

寝間着を着てベッドに潜ると、どういうわけか、いつの間にか眠っていた。

「無事に戻ってこいよー！」

「烙印所持者の未来のために、期待してます！」

「いつでも俺らは待ってるぞ！」

ナージュ村の入り口で見送りに来た人達は、声を張り上げ、次々と旅立つアイリス達を送り出していた。

朝日が僅かに顔を見せて、暗かった建物や木々を徐々に照らし始めている。

「こんな早朝からすごい一生懸命だなあ……」

見送りの人々の熱気に、アイリスは思わず感嘆の声を漏らす。

「……それほど、彼らは僕達に期待しているんだよ」

そこに、フィルツが解説をした。

「烙印に関して、何か手がかりが見つかるかもしれないから？」

「まあ、そんな感じですね」

「じゃあ、そろっと出るか？」

「ちよっと待って！」

村を出ようとしたエーベルをアイリスは思わず呼び止めていた。

「何だよ？」

振り返り、不思議そうにしているエーベル。

ジーオのお守りが内緒のものであることに気がつく、アイリスは何を言えればいいのかわからなかった。けれども、受け取らないまま出発してはいけないような気がした。

「それは……、えっとその……」

「おーい、みんなっ！ 待ってよ！！」

返答に困っていたアイリスだったが、どこからともなくジーオの声が聞こえたとほっとしたのだった。

「ちよっと、寝坊しちゃってさ。これ、受け取って！」

ジーオは一行のもとに駆け寄ると、エーベルに何かを手渡した。

「どれどれ」

エーベルは手にあるプレゼントをちらりと見た。

ジーオが言う『お守り』は彼に似せて作った小さな人形だった。

「……なんか怖そうだぞ？」

しかし、顔が歪んでいたりつぎはぎだらけだったり、上手にできたとは言えない代物だった。

「エーベル！　せっかく作ってくれたのに何言うの！」

ジーオがそれを懸命に作っていたことを知っていたアイリスは、声を張り上げてしまっていた。

「アイリスがそんなこと言うなんて珍しいな」

「なかなか眠れなくて外に出てみたら、ジーオがそれ、夜なべして作っていたのよ！」

「ちよつと、アイリス姉ちゃん！　……でも、間に合ってよかった」

「おまえ、そんなことで夜中まで起きていたのかよ！」

「大丈夫なのかい？」

「どうりで眠そうだったわけね」

エーベルとセリシアはただ呆れ返るばかりだったが、ロゼットはジーオの目に隈があるのをちゃんと見ていたようだった。

「でもそのあなたの気持ち、この人形と持っていくわ」

「本当！？　良かったあゝ」

ジーオはロゼットの嬉しそうな顔を見るとほっと一息ついた。

「お前、これ持ってるよ」

エーベルは持っていた人形をアイリスに渡す。

「えっ、なんで私？」

「そんなに言うんだったら、一番大切に持ってそうだろ」

「うん。大切にする」

アイリスはジーオの人形を手にとると、壊れやすいものを持つように優しく握りしめた。

「じゃあ、こんどこそ出発とするか。元気だな、ジーオ」

アインがジーオの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「うん！　アインさんこそ」

それに対して、くすぐったそうにジーオは笑顔を浮かべた。

「あらジーオ。どこ行ってたのかと思ったわよ」

「起きろって言ったのに起きなかったしなあ」

一行がナージュの外へ向かうのと入れ違いで、ジーオの両親は彼のもとへと向かった。

「なあに、あいづらのことだから大丈夫だ、はっはっはっ!!」

「そうだよね、父さん」

一行の六人は並んで一歩一歩歩き出す。

ジーオは彼らが森の奥へ行って見えなくなるまで、手を振り続けていたのだった。

3. 向かった先は

アイリス達一行は、来る日も来る日も歩き続けていた。

隊列はアインを先頭にして、アイリス、セリシア、フィルツ、エーベル、ロゼットと続いている。

ナージュ村がある山を降りて行って、伝っていくのは村に向かった時と同じような森景色。

右も左も区別できないような光景の中、一行は地図と磁石を頼りにして、目的地である基地に向かって西へ西へと進んでいったのだった。

「大分、遠いのね……」

知らず知らずのうちにアイリスの口からため息がこぼれ落ちる。

「まあ、村が辺鄙^{へんぴ}な場所にあるだけさ。行くのにも時間がかかっただろう？」

そんなアイリスを励ましたのは先頭を歩くアイン。

「ここまで遠くはなかったような気がします」

「兄貴のことだから、どうせ近道を探したんだろうな。まあ、頑張ろうよ」

セリシアも、共にアイリスを励ました。

（みんなが心配してくれるのなら、もう少し頑張れそうな気がしてきた）

彼らがただ単に声をかけてくれるなんてことは、本当にさり気ないことだ。けれども、人の温もりに飢えていたアイリスにとっては、歩き続ける原動力にさえなることだった。

仲間がいるということはどんなに心安らぐことだろうと、アイリスはつくづくと心に思っていたのである。

「何かあったのか、アイリス？」

音符を飛ばしているかのように楽しげに歩くアイリスが珍しいのか、エーベルは彼女の後ろから声をかけた。

「べつに、何でも」

返ってきた言葉とは裏腹に、アイリスの声はいつもより高い。

「にしては楽しそうだな、って思ってたさ」

「そ、そうかな……？」

「変なアイリス」

「それじゃあ、もう歩くよっ！」

「……本当に、どうしたんだ？」

アイリスが突然むきになるのはよくあることではあるが、それでもエーベルは呆氣にとられていた。

それから彼らが歩き続けると、森の出口と思しきものが見えてきた。

森の外は、木々がまばらに点在しており、一帯は草原の絨毯だ。

辺りには田畑や小屋が点々と見られる。ロゼットが言うには、軍の基地はこの先にある小さな町のはずれにあるようだった。

「やっぱり、町の警備は厳しいわよね」

「だな」

「だ・か・ら。会議で話したとおり、私達は裏をかくわよ。役割は、分かってるわね」

「はい」

ロゼットが決めた役によると、彼女自身とアインとエーベルとセリシアの四人が軍人に変装して、アイリスとフィルツを連行したふりをする。そして、エーベルとセリシアが見張りのふりをして地下牢にてアイリスとフィルツと烙印持ちの人々を助けて、その間にロゼットとアインが上層部の機密情報を探る、というものだった。

出発してから寝泊まりに使っているふたつのテントを広げて、四人はどこからかロゼットが用意した軍の制服に着替える。

旅の荷物は全てテントの中に入れて、皆が最低限の手荷物だけを持った状態になった。

そして、テントの大きさよりも少し大きいくらいにアインが木の

棒で何やら輪っかを描いていた。

「まあ、見てなって。……そりやあっ！」

アイリスがその様子を眺めていると、アインは左手を、勢いをつけて高く挙げた。

すると、輪っかの中の地面はまるで抉られたかのように宙に浮く。彼の烙印の力は特定の場所の重力に干渉するもの。今回は、大地に向けてその力を使っていた。

「長くはもたない。早くテントを埋めろ！」

しかし、重いものほど干渉できる時間は少ない。そのために、アインは皆に向かって叫んだ。

エーベルとフィルツで一つ、アイリスとセリシアとロゼットでも一つのテントを持って、地面にぽっかりできた穴にテント（と、中の荷物）を投げ入れた。

テントが穴に収まったことを確認すると、アインは浮かせた土を元に戻した。

その土を適当にならすと、この下にテントと荷物が埋まっているなんて想像もつかないだろう。

「……テント、泥だらけにならないかな？」

「俺たちがすぐに戻ればいいだけだ」

アイリスはそんなことを本気で心配している様子だ。そんな彼女に、わははと笑いながらアインが答える。

「絶対に生きて、帰ってこような！」

「じゃあ、基地に向かうわよ！」

セリシアとロゼットがここはうまくまとめて、軍の基地へと向かった。

今度は、諜報活動はお手の物のロゼットが先陣だ。

基地に向かうには、町の中を通らなければならない。しかし、アイリスは捕まって連行されていることになっているため、ともに町の様子を見る余裕はなかった。

それに、ロゼットからは「景気悪そうな顔をしておきなさい」と

きつく釘をさされている。アイリスにとってみれば、連行されたふりなんてしていると、以前に本当に軍に連行されたことを思い出してしまい、いい気分になる訳がないのだが。

通りすがった町の人々も、じろじろと冷たい視線を投げかけたり、見てみぬふりをしたり、まるで無関心だったりと一行に直接ちよっかいを出すことはまるでなかった。

「どうした、お前たち」

基地に到着すると、恰幅のよい軍人がロゼット達の方を見ている。

「烙印持ちを二人ほど、捕まえておきました」

感情がまるで見当たらない声で、ロゼットが答えた。

「よろしい。地下牢にでも放り込んでおけ」

「了解しました」

軍人はびしっ、と敬礼した。

ロゼットもそれに続く。演技がとても様になっていた。

彼らが本物の軍人でないことに、彼はまるで気づいてはいなかった。

一行は石造りの丈夫そうな基地の中へと足を進める。

真っ白で無機質な廊下を歩き、地下牢への階段を探した。たまに歩いている軍人とすれ違うこともあるが、人通りは少なかった。

分かれ道までたどり着くと、一人だけ帽子をかぶっておらず、同じ軍のグレーの制服のなかでもとりわけ凝ったデザインのものを着た軍人が歩いてきた。

鋭い目つきに、鳶色の硬い髪。恐らく、この基地の中でもかなり地位が高いようだ。将校だろうか、はてさて將軍だろうか。

「お前たち」

「はっ」

軍の制服を着た四人は、手をびしっと張り敬礼をした。

セリシアが一瞬とまどい、声が裏返っていたが、何も知らない人が見れば新入りの下っ端とも見えなくもない。

囚人のふりをしたアイリスとフィルツは、視線を下にそらせた。アイリスは、演技をしてなくとも体が震えるのを感じていた。

「見ない顔だね」

「あた……いや、我々は……」

将校だか將軍だかは、明らかに作られた微笑みをしていた。

セリシアが何とかこの場を凌ごうと考えていたが、それも無駄なことだった。

「お前たちが何者なのかは、もう分かっている。安っぽい劇を見させてもらった気分だよ」

将校はセリシアを左腕で捕らえて、もう片方でナイフを向けた。

「セリシアに何をするんだ！」

冷静なフィルツにしては珍しく、前に出てセリシアに駆けつけようとする。

「へえ、仲間思いつてやつ？」

「痛っ」

そんなフィルツを態度では無視して、将校はセリシアの左手にナイフを斬りつけた。

しかしながら、露になったセリシアの左手は、将校がつけた切り傷の他には何もない。

「……烙印を、持っていない？」

「そうよ。とんだ勘違いだったようね」

ロゼットのフォローに、うまくやってくれた、とエーベルはささやいた。

「だが、俺の居城に勝手に入り込んだ罰は大きい。ここで、死んでもらう。生きたいと願うならば、そう願ったことを後悔させてあげる」

「うっ……っ」

將軍と思しき男に首を絞められ、セリシアは息をするのにも苦勞している。

（どうしよう、セリシア……）

「てめえ……待ちやがれ！」

アイリスは軍人から放たれた危なげなオーラに怯んで、ただ祈ることしか出来ないでいる。

そんな彼女がセリシアを助ける方法を考える前に、エーベルはとつくに行動に移していた。

彼の左手から放たれた光の球は、真っ直ぐ軍人目がけて突き進む！

「やはり、その兄さんは烙印を持っていたのだな。……面白い」

その高速の球を悠々とかわして、軍人は口だけで笑った。

「……やるってか？ いい度胸だ」

「兄貴……」

既に戦う気であるエーベルと、それを不安げな表情で見つめているセリシア。

まるで時間が止まったように目で対抗するセリシアにいてもたってもいられず、アイリスはありったけの声で叫んでいた。

「やめて！ それは無茶だよ！！」

それは、セリシアの想いを汲み取ったようなものだった。

二人ぶんの少女の叫びは、無機質な壁に反射して、ただ廊下に響いている。

「アイリス……？」

「ただ、心配してあげただけ」

「……とにかく何とかしてやるさ。こいつは俺が片付ける」

「ちょっと……！」

アイリスは届く距離でなくとも、とっさに手を伸ばした。

「いちいち俺に口出しするな！」

エーベルに怒鳴られて、アイリスはとっさに手をひっこめる。

彼女はおとなしくしている他なくなっていた。

「んじゃ、行くぜ」

「烙印なんて、ただの小細工だ」

エーベルは、左手の烙印を堂々と将校に見せる。

将校もセリシアを人質にしたまま腰にぶら下げたサーベルを抜き、戦闘態勢に入る。

エーベルと将校は真っ向から立ち向かう姿勢となった。

光と剣がぶつかり合う。

エーベルの放った光の眩しさに、ただ見守ることしかできないアイリス達はとっさに目をつぶる。

その次に、アイリスは誰かに肩を叩かれた。

目を開けたとき、アイリスの目の前にはセリシアがいた。

光のどさくさで、逃げるのができたらしいが、喜ぶにも喜べないものだった。

次に見たのは、数カ所に傷を負ったエーベルと何ともない将校の姿だった??。

「やられた、か……」

「そっくりさんの彼女がとっさに逃げてくれたおかげだよ」

以前までセリシアを抱えていたとはいえ、将校の実力は桁違いだった。

彼は目にも留まらぬ速さの中、何度もエーベルを斬りつけていたようだ。

一つ一つの傷はそこまで深くはなかったが、右腹に突き刺された傷だけは違った。

「だから、だから言ったのに……」

血を流し、膝についているエーベルの様子は、アイリスにとって見るに耐えきれないものだった。

ぽつり、ぽつり。

床が点々と赤く染まる。

知らないうちに、アイリスの目からは涙がこぼれ落ちていた。

自分勝手に、口が悪くて、無茶ばかり。

それでも、わずかな希望を見いだせたのは、元を辿るとエーベル

のお陰なのだから。

「バカ兄貴が！」

「とにかく、応急処置を」

感情を爆発させるセリシア。

一方フィルツは、きれいな布を取り出して、エーベルの右腹に当てた。

真っ白だった布が一瞬で真っ赤に染まる。

流れ続ける血は止まる気配を見せなかった。

「俺はまだ……戦え、るぜ……？」

わずかに目を開けて、エーベルは立ち上がろうとする。

「喋るのも禁止！ ちょっとは大人しくすることを覚えるべきだ！」

「ったく、……るせえ、な、フィル……ツ……」

フィルツに抑えられると、そのままエーベルは目を閉じてしまった。

「大丈夫なの……？」

かすれた声しか吐けないアイリス。

「今は気を失っているだけだ。後で、ちゃんとした治療をしなければ」

フィルツは、ありのままの事実を語るだけだった。

「次は誰だ？」

将校は腕の立つ者は早く挑め、といわんばかりに一行に近づいていく。

こつり、こつりと響く足音が妙に目立った。

一行が追いつめられようとした、まさにその時。

突然、大慌てで将校の部下と思われる軍人が走ってきた。

「少将、大変です！ って、騒がしいと思ったら何なのですか？

この騒ぎは」

彼のほうも、何かありそうな様子だ。

今のところ一行に目もくれていないのが、不幸中の幸いだった。「お前らが気にすることでない。そっちは何があったのだ？」

「伝言を。……基地が1階奥から、燃えています。原因は……さっぱりです」

4. 想いを込めて

「そんな馬鹿な！」

軍人から告げられた事実、セリシアは口をぽかんと開けるばかりだった。

「……君は烙印を持っていないから、そう言えるのだろうね。大事な大事な仲間は、憎らしい軍の基地が大騒ぎになって、さぞかし嬉しいのでしょうね？」

少将と呼ばれた男はセリシアに向かって、背筋が凍り付くかのような笑みを浮かべた。

体がざわりとする。

アイリスは男にやり場のない怒りを感じていた。

セリシアがこんな、くだらないことで喜べる人間だったら、今こうして分かり合えることはなかった筈だ。

「……違う！」

アイリスは、苛立ちの感情が口へと到達するのを抑えることができなかった。

「アイリス？」

セリシアは切れ長気味の目をぱちくりとさせて、アイリスを見る。「ここで火をついたら、エーベルは助からない。そう言いたかったんでしょ、セリシア？」

セリシアに向けるアイリスの目には迷いが見えなかった。まるで、アイリス自身もセリシアに同調しているかのように。

「バレバレか。……その通りだよ」

「やっぱり」

セリシアが落ち着きを取り戻したことに、アイリスはほっと一息をついた。

そして、軽く口を緩めてセリシアに微笑を向けた。

「それに、他人の不幸を喜ぶなんてただの馬鹿じゃないか」

「そう……だよね」

セリシアの何気ない一言に、暗き過去が頭に浮かぶ。

アイリスは気持ちが暗くなっているのを抑えられなかった。

（じゃあ、私をいじめた人たちは、単に頭が弱かったのだろうか）
かつて学校に行っていた頃、徐々にアイリスを追いつめて、烙印が現れたことをきっかけにアイリスの居場所を完璧に隠蔽した人たち。

彼女達は、ただアイリスが困りうろたえることを喜んでいたような気がした。

そんな人たちに振り回された自分も馬鹿らしい。アイリスは今となってはそれが悔しくて、唇をきゅっと噛み締めた。

「……あんた、やる時にはやるのね」

「なっ……それはどういうことですか!？」

ロゼットがぼそりと耳打ちした言葉に、耳まで真っ赤にするアイリス。

「ふふっ、な・い・しょ。でも、いつも素直でいた方がいいんじゃないかしら？」

アイリスの裏まで見通しているかのように、ロゼットは意地悪げに微笑む。それは、ロゼットなりの励まし方でもあったのだ。

「おい、このままここに居座るのはまずくないか？」

その時、廊下が徐々に暑くなっているのをアインが察知した。

徐々に徐々に、炎は一行がいる廊下まで勢力を上げてきたようだ。

「確かに。少しばかり暑いですね」

介抱に専念していたフィルツが顔を上げる。

「じゃ、収穫ないのも寂しいけどとっとと退散しましょ」

「それが得策だ」

アインは倒れているエーベルを背負う。

フィルツが処置していたお陰で、流れ続けた血も随分と止まっていた。

「……逃げる気だな。皆の衆に、奴らを追うように伝えておけ」

「了解しました」

少将は部下の軍人に命令を出すと、逃がすまいと一行に立ちほだかろうとする。

「今だ！」

アインは重力に干渉して、一瞬だけ少将の動きを止めた。

彼によると、人の重力に干渉するには、多大な精神力が必要らしい。それに、エーベルを背負っているために術に専念できる状況ではない。

そのため、ここぞと言う時にしか使えないが、それは抜かりのない少将を切り抜けるための切り札ともなりうることだった。

「ありがとな、アイン！」

そう言って駆け出したのはセリシア。

ロゼット、フィルツ、アイリスもセリシアの後を続いた。

アイリスは駆けてゆく皆に追いつこうとやっけになっていたが、距離は徐々に開いていった。

アインはエーベルを背負っているものの、それでもアイリスより足が速かった。

以前の脱獄の際に手を引いてくれたエーベルは走ることもままならない。

焦りがじりじりと湧いてくるのをアイリスは感じていた。

（追いつかなきゃ。早く走ってよ、私の足）

足を必死に動かしていても、開いた距離が縮むことはない。

目線の先はT字路になっていて、左右に道が分かれていた。

アイリスが一行の行き先を見ようと前を見た、その時。

T字路の脇から現れた軍人はアイリスを見るなり、そちらへと向かっていった。

アイリスはすれ違うようにしてやり過ごしたい、と考えた。

しかし、それはうまくいかなかった。

次の瞬間、アイリスは足をひっかけられて、派手に転んでいた。

ぶつかった衝撃で鈍い音がしたが、廊下に響くことはなかった。前で逃げている一行には、聞こえていないかもしれない。

その時に足をひねったようで、立とうとしてもうまく動かない。

炎はアイリスの数メートル後ろにまで到達している。アイリスを転ばせた軍人はその隙に逃げ出したのか、姿は見えなかった。

助けて、と誰かに言いたかった。

けれども、助けを求められる相手はここにはいない。

それに、前で逃げている一行に声を届けられたとしても、わざわざ自分を助けるだけに道を引き返すのは危険極まりないことだとアイリスは思った。

（それでも、逃げなきゃ……）

その思いだけが、アイリスの身体を動かした。

ずきずきと足に響く痛みを忘れようと、無事に生きて逃げることにだけに意識を集中させる。

しかし、気付いた時には、アイリスは軍人に囲まれていた。

炎からも、軍人からも、アイリスは追いつめられていた。

（……このまま、何もかも氷付けになって！）

一瞬だけ脳裏に浮かんだアイリスの想いが、彼女の左手の烙印を光らせた。

暑かった廊下はすぐに冷え、軍人の動きは鈍ってゆく。

吹雪は狙うように軍人に纏わりついて、離れようとはしない。

（嘘。何が起こっているの……？）

結果的にはアイリスの身を守ることはなったとはいえ、アイリスは動揺を隠せなかった。

わずかに感じてしまったことであっても、烙印は吹雪を呼び起こしたからだ。

（何がなんだかわからないけど、とにかく追いつかなきゃ）

廊下はまだ吹雪いてはいるものの、アイリスは不思議と寒さを感じ

じなかった。

（みんな……！）

逃げている軍人に紛れて、目の前にはアイリスが追いつこうと必死になっていた仲間が走っていた。

軍人達の中は、彼らに攻撃をしかけてくる者もいれば、ただ必死に逃げているだけの者もいた。

最後尾でロゼットがツタを張り巡らせて応戦しているが、寒さのせいだろうか、ツタの動きは鈍っていた。それに、仲間達は長い逃避行で疲れた表情だ。

「ちよっと、どうしてくれるのよ、アイリス！ 私のツタが役にたたなくなってるじゃないの！」

ロゼットと目が合うと、彼女はアイリスに向けてしかめっ面をしていた。あからさまに不機嫌だ。

「でも、そうしなかったら、私が……」

「ああ、そうね。無事で良かったわ」

棒読みで投げやりな口調のせいで、喜んでいるようには見えない。アイリスはそんなロゼットに何も言うことができなかった。

「……あのさ」

ロゼットはそっとアイリスにつぶやく。

「えっ？」

アイリスは、てっきりロゼットが怒っていると思っていたために、彼女の口調の変化に戸惑いを隠せなかった。

「あんたがこれだけやらかしたなら、最後まで何とかするのよ」

ロゼットはそれだけ言うと、またアイリスに背を向けて全力で走って行ってしまった。

アイリスはちらりと左手の烙印を見る。

（ここまで追いつくことまで出来たんだ、私がしっかりしなくちゃ！）

伝えるべくは、烙印の思念。

（みんなを守って！）

アイリスの想いは、床から氷となって現れた。

氷は軍人達の足を徐々に捕らえてゆく。動くことが出来なくなれば、追いかけることもままならないだろう。

そうして、アイリスは一行に続いて、なんとか出口まで向かうことができたのだ。

しかし、外は逃げ出してきた軍人達であふれかえっていた。

「なんとかかまかすんだ」

アインは一行にだけ聞こえるような大ききでささやく。

アイリスはそれに頷こうとした。しかし、突如として頭がぼんやりし始め、何も話を聞きたくないと思うようになってしまった。烙印の力を使い過ぎたのだろうか。でも、ここで倒れる訳にはいかない。

アイリスは目を開こうと、まばたきを繰り返した。が、彼女の努力も虚しく、次の瞬間にはまどろみへと堕ちて行ったのだった――。

5. 固執者

右の脇腹にずきずきと痛みを感じ、エーベルは目を開けた。

眼前に見えるのは、テントの屋根。そこで彼は、自分が倒れている間に、軍の基地を抜け出したことを悟ったのだった。

エーベルは、ぼんやりとしか像が映らない目で手を見ると、包帯が巻かれきちんと怪我の処置がされていることに気がついた。

(……フィルツに礼を言わないとな)

後に説教をしにやってきそうな医師見習いの青年の顔が目には浮かぶ。

そして次々に浮かぶのは、共に軍の基地まで歩んだ仲間達の顔だった。

(……そういえばあいつらは何処へ行ったんだ?)

「よかった! 兄貴、気がついたんだな」

仲間達の行方を考えていると、セリシアががしっと、感無量でエーベルの手を取る。

エーベルは反射的にセリシアの顔を見ると、彼女の目はうるんでいる。それに、なんとなく隈ができているようだった。

「痛いって、セリシア。俺……いったいどうなったんだ」

「……あの戦いで倒れた後、ずっと気を失ってたんだよ」

「……はあ? じゃあ、情報収集はどうなったんだよ」

目をぱちくりさせ現在の状況を確認しようとするエーベル。セリシアは握りしめた手を緩めるものの、表情が曇った。

エーベルは彼女の表情を察する。

「駄目だったのか」

「……ああ」

「……で、そのこいつはどうしたんだ?」

セリシアを挟んで、テントの右奥には栗色の長い髪、眠っている少女の姿が見られた。

彼女は安らそうに呼吸をしている。その様子はまるで、血の通った人形のようなだった。

「今回の功労者だよ。……単に寝てるだけだ」

「作戦は失敗じゃなかったのかよ？」

「アイリスがいなければ、あたし達は今頃お陀仏だっただろうね。情報どころじゃない」

「まさか、烙印の力を使い過ぎたってことか？」

「……そういうことになるな。彼女は基地を脱出してから、ずっと眠りっぱなしだ」

セリシアが一瞬息を詰まらせたのを、エーベルは見過ごしていなかった。

彼女は自分のこともアイリスのことも、倒れていた間にどれだけ心配していたのだろうか。烙印を持たない彼女にとっては、自分が何も出来なかったことが歯がゆかったに違いない。

『セリシアー、人手が足りないの。ご飯作るの、手伝ってくれる？』
外からはロゼットの声が聞こえた。

「じゃ、あたしは夕食の手伝いに行ってくるよ。兄貴、今回ばかりは大人しくしていてくれ」

「わかってるって」

「兄貴にもう一つ、頼みがあるんだ」

「何だ？」

「アイリスが目を覚ましたら、あいつに『よくやった』って、伝えてやってくれ」

それだけ言い残すと、セリシアはテントの外へと出て行ってしまった。

（大人しくしてるって言われてもなあ……）

エーベルは再び横になる。

けれども、瞳を閉じてても眠る気にはならなかった。

外からは葉がそよ音や何かしら焼いているような音が聞こえて

きたが、テントの中はとても静かだ。

人ひとりぶんほどの空間を挟んで隣に眠る少女の寝息が目立っていた。

エーベルは知らず知らずのうちに穏やかに眠る彼女の表情を可愛い、と思ってしまうていた。

いつもの彼女の、何かとぴりぴりしていちがちなオーラはそこにはないからだろうか。

けれども、それを認めてはいけなような気もする。

認めてしまえば、『かつてと同じ結末』を迎えてしまうような気がして――。

(……いや、気のせいだろう)

「……？」

エーベルが一時の感情をかき消そうとすると、眠る少女のまぶたはぴくりと動く。

「アイリス？」

エーベルが平然と少女に声をかけると、ややあって、ゆっくりと彼女は目を開けた。

「わっ！」

彼女は一度瞬きをして、エーベルの存在に気付くと、驚いたように目を見開いた。そして、後ずさりをする。

「そんなに驚くことでもないだろ。調子はどうだ？」

「私、どうしちゃったの？ それに……」

「ずっと寝てたんだってよ」

アイリスは起きるなり、落ち着きがない様子だ。掛けられていたブランケットをぎゅっと握りしめている。

そんな彼女に、エーベルはきっぱりと事実を述べた。

「そう……」

アイリスは顔を隠すようにうつむいた。

「一つだけ、言っとく。……お疲れさま」

「え？」

下を見ていたアイリスの目が、エーベルの方に向く。

「基地から逃げるとき、活躍したじゃないか」

「どうしてそれを――」

エーベルはとっさに彼女の左手首を掴んでいた。

彼女の大きな、紫の瞳と一瞬目線がぶつかり合う。

けれども気恥ずかしくなったのか、すぐに互いの視線は反対側を向いた。

「……感謝するならこの左手にしやがれてんだ」

「私の、烙印……？」

アイリスは左手の甲に視線を向け、白い肌に刻まれた印を見つめる。

「こいつの力のお陰で、俺達はここにいるようなもんらしいからな」

「でも、私は……」

「ここに寝かされていたのはなんでってか？」

「そうよ！ もう駄目だと思っていたもの。死んでいると思った」

「それは烙印の使い過ぎだ。だったら俺が生きてることの方が不思議じゃないか？」

「私も不思議に思ったよ。……よかった」

アイリスは小声でそっと、言葉を紡いで付け足す。

思い起こすと、なんだかんだで彼女は自分のことを心配していたんだとエーベルは気付いた。

「……考えてみれば俺たちも皮肉なもんだよな」

エーベルは天井の方に目をやった。

「何が？」

「烙印、だよ。こいつに恨みを持っていながらも、こいつの力を借りないと俺たちは身を守れない。いや、守りきれない時もある」

「だって、私たちの味方は少ないじゃない」

「確かに、多勢には無勢だ。けど、味方が少ないからこそ俺は、烙印の力を利用して戦うことしか出来ねえんだよ」

アイリスがちらりとエーベルの顔を覗くと、彼はどこか悲しい顔

をしていた。

自分をここまで連れ出したのも、きっと烙印を持った人々の未来を想ってまでのことなのだろう。軍に抗い、軍が烙印持ちを狩る現状の真実を探ることはリスクの高い賭けみたいなのなのだろうが、そこまでしてまで賭けに臨むエーベルの確固たる姿勢にアイリスは気にかかっていた。

「……だからこそ、私に協力を求めたのね？」

「そうだ。……でも、怖い思わせっちゃったな」

「ううん、気にしないで。私にとっては、どんなことだって怖いら」

「意外と強いんだな」

「臆病すぎなだけ」

それっきり、二人の間には沈黙が訪れていた。

『失礼』

ややあって、テントの外から声がした。

「二人とも、起きられるじゃないか」

テントの入り口を開けたのはフィルツだった。

彼はそのままテントに立ち入り、エーベルとアイリスの正面の、ちょうど二人の間の位置に座った。

「調子はどうか？」

フィルツはエーベルとアイリスを交互に眺めつつ尋ねた。

「まだ本調子じゃねえけど、動けるには動ける。ありがとよ、フィルツ」

「また君は……。そうだアイリス、頭が痛くなったりはしていないか？」

フィルツはエーベルの発言に頭を抱えると、アイリスの方に目を向けた。

「痛いというか、頭の中がもやもやして、はっきりしない感じはする」

「烙印は精神や脳と何らかのつながりを持っていると僕は考える。
心を落ち着けるべきだよ」

「そうしてみる」

「前言撤回のようだけれども二人とも、外には出られるか？ 食事
の準備ももうじき出来る」

「ああ。ありがとな」

テントの外は、森の中でも木がまばらな所だった。

けれども、身を隠すという目的があるために、森の出口はそう遠くはないだろう。

二人がテントを出ると、待っていたのはロゼットの一喝だった。

「もう、料理担当が倒れてどうするのよ！ それにエーベルも。あんた、また無茶したわね」

旅に出てからは、料理が得意なアイリスが食事担当になることが多かった。

けれども、ロゼットもナージュ村の外に出ることが多いため、野営の食事くらいは作れるとアイリスは思っていたのだが。

「ごめんなさい……」

「アイリスの料理の腕なら、いい嫁さんになれると思ったんだがな……」

「な、何を言ってるんですか？」

アインもロゼットに便乗している。アイリスは顔を真っ赤にしていた。

「冗談はさておき、無事に起きられてよかったことだ。みんなお前たちのこと、心配していたんだからな？」

「ご迷惑を、お掛けしました……」

アイリスがそう言うと、アインだけでなく、エーベルまでもが笑っていた。

「何笑ってるの」

そんなエーベルを、アイリスは一瞥する。

「いや、律儀だなんて思ってたさ」

「あっ、兄貴にアイリス！ 良かったあ……。ご飯できたからさ、早く座ってよ！」

セリシアに急かされるようにして、エーベルとアイリスは座った。

「今回の騒ぎで、軍の奴らはそこら辺をうろついている。下手な行動はとれない」

食事を始めると、まず始めに口を開いたのはアインだった。

「そうですね。ずっとここに居残ってはいっつ軍に見つかるか分からない」

アインの真剣な様子に、フィルツも顔を難しくする。

「ここは私に任せて。お世話になった所に転がり込むわ。……そう遠くはなかった筈」

ロゼットはアインの横で地図をちらりと眺めると、自信ありげに答えた。

「とりあえずそこへ向かおう。案内を頼む、ロゼット」

「任せといて！」

「出発は、明日の早朝だ。各自体調を整えておくんだぞ」

1. 交錯する縁

朝日が空に顔を現し、徐々に夜の闇をかき消していく。
そしてまた、何事もなかったかのように一日は始まった。

「アイリス、起きるんだ!」

女性陣が寝起きをしているテントの中では、セリシアがアイリスの身体を揺さぶっていた。

「うーん……」

アイリスは寝返りを返すばかり。

なかなか起きようとしないう彼女に、セリシアは困惑していた。一行はまさに出発しようとする支度をしていたからだ。

しかし、前日も疲れから眠りっぱなしであった彼女が起きられない理由も理解できなくはない。

「もう出発の時間よ? 起きなきゃ、無理にでも起こして私の分の荷物も持ってもらうから」

「……え?」

セリシアがいかに起こすかで悩んでいると、ロゼットの脅迫じみた言葉が聞こえてきた。

アイリスはぼんやりと目を開ける。

「冗談に決まってるじゃない。……でも、もう起きて」

(あたしが起こそうとしても起きなかったのな……)

ロゼットのペースに、セリシアはあっけにとられていた。

ロゼットは先陣をきって歩き始めた。

一行は彼女に続く。

アイリスは疲れと眠気が残っていたが、ここで歩みを止めない訳にはいかなかった。ここで立ち止まったら、今までの歩みも意味をなくすような気がするから。

「アイリス、顔色が優れないようだけど?」

アイリスの後方を歩くフィルツは、そんな疲れきった彼女の表情を見かねていた。

「大丈夫……です」

「時には休息も大事なこと。疲れたら、遠慮せずに言って欲しい」
最後尾につくアインも心配そうな顔をしていた。

誰よりも体力がないのは本当のことだけど、だからと言ってそんなふうには気遣われるのも申し訳ない気がした。

（皆はいい人すぎる）

アイリスは、他者の温もりを人よりも知らない。

（だから、烙印を持つ人たちの差別をなくそうと動けるの？）

この長旅に、アイリスはただエーベルに誘われて、不安を抱えつつもなんとなくついてきただけだった。

以前の基地の潜入の時のように、辛いこともあったけれども、仲間達と寝食を共にし、昼は人通りのない静かな森の中で、夜は星と火の下で語らうことは楽しいことだった。

ここが居場所であると、感じられたのだ。

それから、彼らは磁石を頼りにして森の中を歩き続けた。
じきに、目的地である街にたどり着こうとした所である。

「一旦止まれ……誰かいる」

アインは立ち止まったかと思うと、小声で一向に注意を諭した。
彼は森に生い茂る草の揺れを見逃していなかった。

アイリスは周囲を見回してみたが、これといって変化はないように見えた。

がさり。

今度は音がはっきりと聞こえた。道もない、草が密になった場所から。

『皆さん、気を引き締めて』

途端、フィルツの声が頭に鳴り響く。

これが彼の烙印の力、『テレパシー』なのだろう。話には聞いていたが、アイリスは初めて彼が力を使っている所を見た。

フィルツは口を開いていないのに、確かに頭の中に聞こえたのは彼の落ち着いた声。なんだか不思議な感覚にとらわれそうだった。

エーベルは思わず烙印のある左手に力を入れて身構える。

草の中から現れたのは、案の定軍人の一味だった。

数は三人。

彼らはまず、じろじろと一行を見た。

「……貴様らだな、『西の基地』を消し炭にしてくれたのは！こちらにもすでに情報は届いているぞ！」

それから、軍人の一人は残り二人に何かこそ話をしたかと思いきや、とたんに顔を真っ赤にして一向に詰め寄った。

「俺達は火なんてつけてない」

「我々は確かに聞いている。その時、烙印持ち五人と関係者の女が一人『西の基地』にいたことはな！」

あくまで関係ないそぶりのエーベルと、彼の話をまるで聞いているいもう一人の軍人。

このままでは、互いにもつれ合いそうな状況だ。

「確かに、それは俺たちのことだ」

そんな状況を知ったか知らずか、アインはあっさりとその場にした事実を認めていた。

『簡単にばらしちゃっていいの？』

気付かないうちに、心の声が漏れていた。

『僕たち以外にそんな集団は考えにくいからね』

再び、アイリスの頭の中にはフィルツの声が聞こえていた。

こちら側から声を伝えることはできるのだろうか、アイリスは疑問に思う。

『こちらでも聞こえているよ』

まさか、さっき考えたことも伝わっているのだろうか、アイリス

は考えた。

『話するために回線を繋げないと、意味がないんだけど。……そろそろ切ろうか』

何事もなかったかのように、それっきりフィルツの言葉は聞こえなくなっていた。

「でも、我々にはお前らの一味がやっていないと証明できない」

「私たちは、あなたたちのお偉いさんと対峙していたわ。そのお偉いさんに聞いてみてはどうかしら」

一方で、ロゼットとエーベル、それに軍人たちは向かい合って、何やら言い争いを続けていた。

「ま、まさか『あの』ヴァロン少将と会ったのか？ それなら何故、生きている！」

「あいつの所為で死にかけたぞ、俺」

ヴァロンとの戦いを思い出すと、まだ治っていない傷から痛みがよみがえる。

敗れ去ったという事実にも悔しくて、エーベルはその痛みを歯がゆく思った。

（……悔しいが、あいつの言い分ももつともだ）

「へえ〜。あのねちっこいのはヴァロンと言うのね。覚えておくわ」
一方でロゼットはエーベルの様子を気にせず、企むように軍人達を見た。

「おい！ 口には気をつけろ！」

「ええい！ ペちゃくちゃ話している場合ではない！ ここでお前たちを殺す！」

ロゼットの一言に、どうやら軍人達はやつけになっている。このあたり、彼らはあまり立場が上ではなさそうだ。

「私が相手になるわ」

ロゼットはツタを地面から生やす。

ツタは迷い子のように地面をあちらこちらと這いずり回ったが、ロゼットが思念に集中すると、軍人たちの方へ向かっていった。

当然、軍人達もそれを見逃さない。彼らは腰に下げていたナイフを取り出すと、纏わりつこうとするツタを切るのに必死だ。

それでも、切っても切ってもツタは伸び続けた。

「なんだこのツタは！」

「こんな力を持つてるのだから、烙印は滅びるべきなのだ！」

「先に喧嘩を売ったのはあなたたちでしょう」

「ぐっ……」

軍人達は言葉を詰まらせる。彼らはロゼットの巧みな口術に、見事に載せられていった。

その時、何かが爆発した音とともに光があたり一面にまき散らされる。

アイリスはとっさにエーベルの方を見た。彼は黙って烙印のある左手を軍人達に向かって突き出している。

やがて光が空に溶け込むと、目先に写ったのは動かない軍人たちの姿だった。彼らの服は所々焦げている。

気を失ったのか、それとももう命がないのかまでははっきりしない。

しかし、アイリスは彼らの姿を目にして、彼らの方も気の毒に思えてきていた。

何故なら、倒された人間が視界に入り続けていたから。そして、あの時に倒れたエーベルと現在の軍人の姿はとても重なるものがあったからだ。

（確かに軍は私たちに酷い扱いをしてきた。けれど、私たちの方だって大して変わらないんじゃないかな……）

「どうしたんだ、アイリス」

アイリスが考えにふけてると、前にいたエーベルは不意に振り返った。

「ううん……何でもない」

「だったらもう行こうぜ。追っ手がいないとも限らないしな」

エーベルの懸念とは裏腹に、その先の旅路は順調だった。

元々獣道を歩いていたために、軍人の姿はこれ以降見ることは滅多になかった。

「ここね」

ロゼットが周りを見渡してから指し示したのは、大きな石。

「……って、街の外じゃないか!」

そうだ。ここは街を囲う城壁の外、セリシアが驚くのも無理はない。

「静かに。気付かれたらどうするんだ」

大声を出すセリシアを止めたのはアイン。

街の中では、軍人が平気で歩いているかも知からない。

「せっかくだしアイン、石のほうを頼めるかしら?」

「……仕方があるまい。よく見ておけよ?」

アインは烙印の力——石の重力に干渉するのかなと思いきや、両手で大石をずるずると押した。

「さあ、早く行け」

一行が全員地下道に入るのを確認すると、最後にアインは烙印の力を使って石を動かし、入り口をふたたび封じた。

地下道は人ひとりが通るのもやっとの狭い道だった。

ロゼットが先陣をきって進んでゆく。

アイリスは慣れないほふく前身と狭い道に息苦しさを感じながら彼女達について行った。

道を進んで行くと、突然ロゼットが立ち止まり、そして一行はつぎつぎと前身を止めた。

「さあ、入って」

ややあって、再び列は動き始めた。

少し進むと、目の前には明かりと開けられた扉。

その先には、幾何学模様の絨毯が敷かれている。その上に白いソファとガラスのテーブルが置かれ、まるで居間のような。いや、本当に居間である。

地下道の先は、ごく普通の家屋へと繋がっていたのだった。

「クレイクー、シエラー、居るー？」

ロゼットは、中の住人らしき人物の名を呼ぶ。

もしかして、ここが目的地なのだろうか。

「久しぶりの客かと思えば、君たちか」

中からは白いシャツに身を通した細身の男が現れた。

髪は無造作に伸ばされ、後ろで一本に束ねている。身なりは整っているものの、なんとなく野暮ったい雰囲気醸し出されていた。

ちらりと彼の左手に目をやっても、烙印らしきものは見られない。

「よう、クレイク。『研究』は進んでいるのか？」

ロゼットだけではなく、エーベルとも知り合いであったようだ。

彼らはかつて、どんな繋がりを持ったのだろう。

アイリスは不思議な気持ちにとらわれていた。

「あなたは……？」

「文化学者です、表向きはね。でも、私の本当の研究テーマは、烙印の過去、そして何故烙印が存在するのかを解明することなんだ」

2. ビジネストークとガールズトーク

「何故烙印が存在するのか……」

クレイクの研究内容を聞いて、アイリスは不思議な思いに駆られた。

（私は烙印について、何も知らうとしなかった。ううん、知らうとも思わなかった）

ふと、左手の手の甲にある自身の烙印を見つめる。けれども、その茶色い痣は以前と変わらず、アイリスの左手に刻み付けられたままだ。

「君も烙印を持っているだろう？ 烙印の所為で、生きづらさを感じたことが今までにあったかい？」

左手に向けて視線を感じると思い、視線の元へと振り向く。すると、クレイクと目が合った。彼の言葉に嫌みや皮肉は含まれていない。ただ、アイリスと同じ目線に立って問いていた。

「ええ、それはもう……」

「まあ座って、お茶でも飲んでいって。話はそこでしよう」

一行はクレイク宅の居間で、休息のひとつを過ごしていた。

だが、流石に居間にあるソファアに六人も座りきれなかったため、セリシアとエーベルは地べたに座っている。

エーベルは足を伸ばして、あたかも自宅にいるようにくつろぎ、セリシアは、体育座りでそんな彼を見守っていた。

エーベルはロゼットと同じように、今までにこの家を何度か訪ねている。彼がナージュ村を出ている時は、よくこの家が居候の場所になっていた。そのため、クレイクの家の白塗りの壁と暖炉と数々の絵に真新しさを感じることなかったが、どこかでなじみ深さは感じられた。

ややあって、奥から女性が紅茶を六人分、大きなトレイに乗せて

やってきた。彼女は長い黄土色の髪を後ろで一つにまとめて三つ編みにしている。着ているのは、地味なデザインであるものの、裾にはフリルがあしらわれたエプロン。

「こんにちは。……初めましての方もいるかしら？」

彼女は一人一人に紅茶を配ると、控えめに微笑んだ。

「彼女はシエラ。僕の妻だ」

クレイクがシエラと呼ばれた女性を紹介すると、彼女は浅く礼をした。

よく見ると、シエラの左手には、アイリス達と同様、烙印が刻まれている。

「私に大したことはできませんよ？　そよ風を吹かせるくらいです」
アイリスが彼女の左手の方をじっと見ていると、彼女はそう答えた。

きっと、クレイクが烙印について研究しているのも、彼女のことがきっかけに違いない。

アイリスは返す言葉に詰まった。

「あまり、私のことは気にしないでください。ロゼットの知り合いということは、あなたも烙印に関わりを持っているのでしょうか？
ロゼットの仲間なら、私の仲間ですよ」

それはもしかしたら、彼女が力を持たないからかもしれない。けれども、彼女の声には、動揺や煩悶といったものが感じられない強さがあった。烙印というものに、シエラは振り回されていないような気がした。

「ねえ、クレイク。そろそろあなたの研究成果を教えてもらえないかしら？」

ティーカップのハンドルを指で持ち上げながら、ロゼットは口を開く。

「仮説は立ててるけどね、確証はないんだ。それでもよければ、教えるよ。……君たちの話も聞かせてくれたらね」

そしてロゼットとアインは、西の基地に調査に出たこと、そして何らかの原因で西の基地は火事が起こり、調査は失敗に終わったことを余すことなくクレイクに話した。

「……へえ。それは厄介なことだ。よりによって君たちがいる時とはね」

「さらに、俺が見る限りではこの辺りの軍人の数が増えているような気もした」

そしてアインは、自身の見解をクレイクに伝えた。

「……確かに、増えているね。シエラを匿うのも、難しくなっているな。……話は分かった、次は私の仮説を話そう」

「そうこなくっちゃ！」

「よろしく頼む」

ロゼットのテンションとは対照的に、アインは冷静さを崩さなかった。

「端的に言うと、昔から烙印は存在してたけど、あまり表には現れてこなかったんじゃないかって思うんだ」

彼の仮説とは以下のようなものだった。

「どういうことだ？」

エーベルはそんな彼の考えに、疑問を感じている。

「本業の研究をしても、古文書には『烙印』の記述が殆ど見つからないんだ。あるとしても、都市伝説的なもの。今みたいに、烙印持ちを取り締まるということはないように思える」

「きつと、表に出ないよう裏で始末してたんだろう」

迷いなく言いきるフィルツ。

「私も最初はそう考えた。……でも、それにしておかしい点がある。今くらいの人数、烙印持ちがいると仮定すると、裏で始末しきれないだろう。そしてそれは、表に露見することになる」

「言われてみれば……」

クレイクの仮説に疑いを持っていたフィルツであったが、彼の考えの根拠を聞くと、納得せざるを得なかった。

「さつきから気になることがあるのだが」

突然、アインはクレイクに尋ねる。

「どうぞ。答えられる範囲で答えるよ」

「昔から烙印が存在すると言っていたが、その考えの根拠はどこにあるのだろうか？」

「おっ、いい質問だね。それは昔、烙印持ちが神聖視されていた村があったということからきているのさ。もっとも、今は廃墟になっているようだから、その村を知っている人は殆どいないみたいだけど」

アイリスは一瞬、その村がナージュ村ではないだろうかと疑ったが、それは幻想にすぎなかった。村なんて、この世界にはいくらでもあるものだろう。そう考えると自然なような気もするし、ナージュ村は烙印持ちを受け入れていたものの、彼らを神聖視することはなかった。あくまで共存の域だった。

「たまたま、本業でその村へ調査に出かけた時に、見つけたんだよ。所々読めなくなってたけど、確かに村に烙印持ちはいたという記述を」

「その村は、どこにあるのかしら」

クレイクは話を続ける。そこに、ロゼットが口を挟んだ。

「歩いて二、三日ほどかな」

「良かったら、案内してもらえないかしら？」

ロゼットは目を輝かせて、身を乗り出した。新たな発見に、彼女は心を躍らせている。

「大したものはないけど、それでも良かったら。でも、君たちも長旅で疲れているだろう、今日はここで休むといい。私は研究室で寝るとして、空き部屋と私の寝室を貸すよ」

夜が来て、一行はシエラから夕食をふるまわれた。

皆はただ飯に申し訳なさを感じたものの、そんな気持ちが吹き飛

ぶくらしいに食事は美味しく、賑やかなものだった。クレイクやシエラも、久しぶりの来客に喜んでいる様子であったからだ。

そのあとのこと、女性陣は寝泊まりをすることとなる空き部屋へと向かっている。

「おいしかったな、シエラさんの食事！」

嬉しそうに、セリシアはロゼットに語った。

「でしょう？ クレイクもいいお嫁さんを見つけたことね」

シエラのほうを向いて、彼女の背中を叩くロゼット。

「そんな……。照れますよ、ロゼット」

シエラも恥ずかしそうにはしているものの、まんざらでもない様子だ。

外見も性格も対照的なロゼットとシエラがこう仲がいいのも不思議だとアイリスは思ったが、アイリスとセリシアもある意味対照的なものだろう。

「いいなあ。あたしもおいしい料理を作れるようになりたいよ。……なあ、アイリス、料理の極意ってなんだ？」

セリシアも視線をアイリスのほうに向け、彼女の肩をポンと叩いてみる。

「極意って言われても……日頃から料理を作ることかな」

セリシアの迫る目線に戸惑うアイリス。彼女はとっさに思いつきの答えを返した。

「いや、作ってるけどさ」

セリシアはあまり料理が得意ではない。そのため、彼女はこの事実を気にして密かに特訓を重ねていたものの、成果は現れていないようだ。

「……得意料理を作ったらどうかな」

ぼそりとアイリスがつぶやく。

「あっ、それいい！　じゃあ今度簡単に美味しく作れるレシピ、教えてよ！」

「うん！」

「二人とも、仲がいいのね」

笑顔で歩くアイリスとセリシア。そんな彼女達に、シエラは感心していた。

その言葉に、セリシアは後ろを振り返って、シエラとロゼットを見た。

「いや、シエラさん達もだよ」

「私は床で寝るから、皆さんはそのベッドを使ってください」
空き部屋に着くやいなや、シエラはきっぱりと言い切る。

「じゃあ、お言葉に甘えて使わせてもらおうわ」

その言葉に、ロゼットは遠慮なくベッドのうちの一台に腰掛けた。
「あれ、でも二台しかないぞ？」

空き部屋には、シングルベッドが二台。ここにいるのはシエラを除くと三人。

「ロゼット、あなたも床でいいわね？」

シエラは笑顔でロゼットに視線を向けた。明かりがランプしかないので、薄暗い中に光るシエラの微笑みは怖くも見えた。

「えーっ。お姉さんをいたわるべきよ」

「私と大して変わらない年じゃない」

「屁理屈よね、全く……ねえセリシア、セリシアって好きな人とかいたりするの？」

「い……いきなり何を言うんだ、ロゼットは！」

ロゼットの話の切り替わりに予想もしていないセリシアは、顔を真っ赤にして一步引く。

「んー、聞いてみたかっただけよ。ほんと？」

「いないよ」

「案外、運命の相手はそう遠くない所にいたりして」

「あたしはモテないよ。男っばいし、がさつだしさ」

「それは思い込みかもよ。……じゃ、アイリスは？」

「わ、私もいませんから！」

自分にも話を吹っかけられるとは薄々感じていたアイリスであったが、彼女も落ち着くことは出来ないでいた。

「……つまんないの。あんたたち、ウブよねー。お泊まりといったら、この手の話が定番なのに。ねえアイリス、ずっと気になってたんだけど、あんたエーベルのことどう思ってたのかしら？」

「「なっ！」」

思わずアイリスとセリシアは顔を向き合わせていた。

「……アイリスは兄貴なんかでいいのかよ」

「ううん、私は別にあいつに何の気持ちもないんだから」

口をパクパクさせ合う二人の少女。彼女達の様子を、ロゼットは面白そうに見ていた。

「凶星ね。そうこなくっちゃ！」

「……ロゼット。酒、飲み過ぎたか？」

いつもに増してテンションの高いロゼットに、セリシアは焦りを乗り越えて呆れ返っていた。

「ロゼットさんはお酒を飲んでも飲まなくてもこの調子ですよ」

ロゼットが会話に夢中になっていた所に、シエラが加わった。

「私は強いわよ、酒。……で、アイリス。実際どうなのよ？　なんか、よく一緒にいるとこ見るなーって思ってたさ」

「それはそれ、成り行きですよ！」

「またまた、ムキになるんだから」

その時のロゼットは確信犯ではあったものの、アイリスとセリシアにそれを知る由はない。

しかし、その事実を知っていたシエラは微笑を崩さないままだった。

一方、同じ時間。壁を挟んだ寝室に男性陣は泊まることになった。

「隣がうるさいな。……ロゼットか」

『案外、運命の相手はそう遠くない所にいたりしてー』
壁越しに女性陣の会話が聞こえる。

「フィルツ、気にしてるだろ。……ロゼットとセリシアの発言」

エーベルはそんな彼女達の会話を聞き流しつつ、布団に潜るフィルツに問う。

フィルツは眠っているように見えたが、実際に彼は寝ていない。

寧ろ、静かな場所を好むフィルツが眠れるはずもないだろうとエーベルは思った。

「気にしてない」

「嘘だな。お前が俺の妹に気があるのはとっくの昔にわかってる」

「……?」

自信ありげにエーベルは言い切った。そんな彼に、フィルツは何も言葉にできないでいた。

「お前にあいつを幸せにできる自信があるなら、もっと素直になれよ。自信なけりゃ、あいつもお前の気持ちに気付くことはないだろうからな」

エーベルは認めないのだろうかと思ったら、意外なことにフィルツの背中を押すような素振りを見せていた。寧ろ、肝心のセリシアがエーベルから離れられないためか、彼女の気持ちをフィルツに向けることの方が至難の業だろう。

「フィルツ。親代わりとしては悔しい気もするが、お前の行動はバレレだ。寧ろ何故セリシアが気付かないのか不思議なくらいだな」

「……アインさん。何故貴方が結婚してないのかも不思議ですよ」

真面目なアインまでもが茶化すことに、フィルツは軽い憤りを感じていた。

「大人には色々あるものさ」

『ねえアイリス、ずっと気になってたんだけど、あんたエーベルのことどう思ってるのかしら?』

「ロゼットの奴……! 俺、もう寝るわ」

エーベルはふと耳に入ったロゼットの発言に、歯を食いしばらせる。

「お前も人のことを言えないな、エーベル」

「放つといってくれ」

大人の余裕を見せつけるアインに、エーベルはつい、勢いで頭まで布団をかぶせていた。

アイリスだって、共に旅をしてきた仲間の一人のはずだ。エーベルは最初彼女を、心のどこかでは無愛想で神経質な、烙印という鎖に縛られた哀れな少女に過ぎないと思っていた。そして、そんな彼女を救うことが出来たならそれで十分だと思っていた。

けれども、次第に彼女は自身の感情や、ものの見方をあらわにするようになってきた。その変化は、いい兆しであることには違いない。けれども、一番近くでその変化を見ていたエーベルにとっては、彼女という存在がよく分からなくなっているように思えた。

（俺にとって、あいつは……何なんだ？）

その問いかけに対する答えは、まだ見つからない。

アイリスは、辺り一面何もない所に立っていた。

周りを見渡しても、生き物も人工物も見えてこない。まさに、彼女だけがこの世界に存在しているかのようだった。目が覚めていれば夢だと分かるだろうが、眠っているアイリスにとっては夢であるとは考えられなかった。

けれども、この景色は不思議だと感じたのか、彼女は辺りを三百六十度見渡してみる。

地平線の向こうまでよく見ると、遠くに誰かが膝を抱えて座る姿が見えた。遠目からは分からないが、小柄な体格から、幼い少女のように見える。

アイリスは、彼女に近づこうと一步一步歩き出した。

そっと近づいてみても、彼女は膝を抱えたままだ。薄い色であしらわれた、ドレスのような装束が目を引く。どうやら、ごく普通の少女ではなさそうだ。

やあって、彼女はアイリスの気配に気付いたのか、やっと顔を

上げた。

肩にかかる癖のない鳶色のおかつぱ頭に、大きな赤い目。彼女に表情らしきものはなかったが、それでも端正な顔立ちをしていた。

「人に力を刻むのは間違いだったの？」

アイリスに一言そう言ったきり、少女の姿は消え、空間には何も残らなくなった。

3. ずれ始めた歯車

次の朝、いつもよりも少しだけ遅く起きたアイリス達は、クレイク宅のダイニングテーブルと居間のテーブルへと分かれて、シエラが作る朝食をごちそうになっていた。

「よく眠れましたか？」

ふと、シエラがアイリスに尋ねる。

「まだ、眠いです……」

寝ぼけて言葉がままならないアイリス。彼女は意識のはっきりしないぼんやりとした頭の中で、昨日の夢の内容を思い出していた。思うに不可解だった夢のことを。

その夢には、はつきりとした背景がなかった。そして、そこに膝をかかえる少女は歯車がずれたようにアンバランスで、浮いて見えた。そのためか、彼女の印象が頭に強く残っている。

また、夢にしてははつきりとしすぎているのだ。彼女の声は、今でもはつきり思い出せる。さらに不可解なのは彼女が残した言葉だった。

「人に力を刻むのは間違いだったの？」

それが、彼女の唯一発した言葉。

力というものは、この世界で烙印と呼ばれているものなのだろうか。そして彼女は、烙印と何らかの関わりを持っているのだろうか。そう、アイリスは考えた。でも、すぐに決めつけてしまうのも良くない。所詮夢であるのだから、特に深い意味もないのかとも思った。もしも予知夢であるのだったら、クレイクに話をした方がいいのかもしれない。けれども、夢の中の出来事などまるで根拠のないことだ。そう考え、アイリスは夢のことは心の中に留めておいた。

「なあ、例の廃村にはいつ出発するんだ？」

突然、エーベルがクレイクに向けて言った。

「気を早めないで欲しいな。もうちょっと休んでからでも遅くない

し、何より昼間に出たら警備が厳しい」

「じゃあ今夜出発って訳ね？ みんな……特にアイリス、歩ける？」

「あ……はいっ。久しぶりのベッドだったので、疲れもだいぶ取れました」

ロゼットはアイリスの方を見る。アイリスの心強い答えに、ロゼットはつい顔がほころんでいた。

「それは頼もしいことね」

「アイリスは旅に出てからだいぶ体力ついたんじゃないか？」

突然、アイリスの頭に何かが乗ったと思ったら、それはアインの手だった。アインは大きい無骨な手で、ポンポン、と優しくアイリスを撫でていた。

「そ、そうですか？」

子供でもないのに頭を撫でられるなんて不思議な気分だ。とっさに前髪に手をやりつつアイリスはなんとか答えた。まあ、元が全く体力がなかったものだから、裏を返せば伸びしろが十分にあるということだけでも。

「クレイクもこう言ってるんだし、昼間はゆっくり休んどくんぞ」「ありがとうございます」

日が落ちかける頃を見計らって、クレイクとシエラを加えた一行は街の外へと再び出た。

村に着くのに、三日とかからなかった。けれども、村で感じる空気は街で感じるそれとは全く違っていた。

「……何が起こったんだよ、ここ」

セリシアの言うことももっともだった。

辺り一帯には、空き地が広がり、点々と荒れ放題の廃屋が残っている。それらが村の名残を残しているばかりだった。所々に建物の残骸と思われる石片があり、その光景は荒々しくも痛々しい。

「それはまだ調べている最中さ。人がいなくなってからだいぶ経っているみたいだから、よく分からない。けれども、人為的な手が入

ったことは確かだね」

「もしかして、軍の奴らが……」

「軍が烙印に対して本格的に弾圧を加えたのは、最近のことだ」

「え？」

クレイクの言葉に、きよんとするセリシア。

「……知ってる人もいるだろうが、これは話しても大丈夫だろう。半年前に軍の総督が変わったことで、軍の方針が変わったんだよ。昔はここまで出しゃばっていなかった」

「そう……なのか？」

幼い頃にナージュ村に定住してから、セリシアは村を出たことが殆どなかった。そんな彼女は、村の外の事情をあまり知ることはなかった。知りたいと兄や村の人々に聞いても、まだ小さかったセリシアには詳しいことを教えてはもらえなかった。

「……世界は、段々と俺らを虐げる方向に動いてるって訳だ」

嘲るようにエーベルはつぶやく。

「そんなこと、知らなかった」

震えが止まらない。セリシアはやり場のない思いがふつふつとこみ上げてくるのを感じずにはいられなかった。

「本当は、セリシアまで知るべきことじゃねえんだ」

「あたしが烙印持ってないから、関係ないっていうのか？ 皆が辛い思いをしているのに、それを知らずにいられる訳がないだろ？」

……兄貴は、いつもそうだ。あたしの考えには目もやらないで、自分勝手に動いてるだけなんだよ？」

心の中で爆発した思いが、セリシアの口から飛び出していた。

「セリシア、落ち着いて」

フィルツはそんなセリシアの腕を引く。

「フィルツは黙ってて。これはあたしと兄貴との話だ」

「そうか……」

セリシアは引かなかった。腕を彼女に払われ、フィルツは呆然とするほかなかった。

（彼女の空白を埋めることは、僕には出来ないと言うのか？）

フィルツは、セリシアの力になれないことを齒がゆく感じていた。彼女を想っているからこそ、なおさらその気持ちは強かった。

ガラスが割れるように、皆がばらばらになっていくようだった。

アイリスはただその場に立ち尽くすことしか出来なかった。何もかける言葉が見当たらないのが心苦しかった。

「おいで。君と話がしたい」

ふと、頭の中に誰かの声が聞こえる。何処かで聞いたことのある声だと思ったら、昨日の夢の少女と同じ声だ。

アイリスはつい、声のする方向に向けて駆け出していた。そこに向かわなければいけないような衝動を感じた。そして、この尖った空気からなんとしても抜け出したい気持ちが強かった。

たどり着いたのは、廃村の中でもひととき目立つ教会。

正面の扉はツタや苔で覆われていたものの、裏口にはそういったものが目立たず鍵もかかっていなかったために、建物に入ることは不可能ではなかった。が、中は荒れ放題になっており、地面にはところどころ瓦礫が転がっている。

「……はじめまして。力を刻まれた、不幸な娘さん」

聴衆席を挟んだ正面の通り道だった瓦礫の上に少女は直立し、微笑んでいた。

「あの、夢で……会いませんでしたか」

間違いない。この少女は、夢で見た少女と同じドレスをまとっている。アイリスを見つめたその目は、吸い込まれそうな赤い目をしていて。

「君が夢で私を見たというなら、それでいい。けれども、私はあなたの顔を初めて見ました」

「あなたは……」

「この世界の管理者……と言ったところかしら、君たちから見れば。

……ねえ、君のその『烙印』とやらが何なのか、知りたくない？」
少女は抑揚のない声で語る。

アイリスは一瞬答えに躊躇った。けれども、彼女にしてみれば、自分を長年苦しめてきたものの正体を知りたいと思うのは当然のことであり。

「……知りたい、です」

「烙印のせいで世界は混乱しているわ。その動乱を抑えるためにも、私の力と、あなたのその『氷』の力。それが必要になってくるの。君の力と君の命、それを引き換えにしてあなたは真実を知ることができるし、世界にも秩序が訪れる」

「私の力と、命……本当にそれだけ？」

「私は契約には忠実です。君には力を使ってもらう前に、真実を見せましょう」

うふふ、と少女は品よく笑う。

けれども、彼女に疑いは残っていた。聞きたいことがある。だから、ここでひるんでは駄目。アイリスは、そう自分に言い聞かせた。「私の命を犠牲にしなければ、世界の混乱は救えないというの？」

「そうです、あなたの力を限界まで使わないといけませんから。……さあ、どうしますか？」

追いつめるように、少女はアイリスに答えを求める。

「皆が幸せになれるのならば、私は死んでもいい。……けれど、もう少し考えさせてください」

少しの時を置いて、アイリスははっきりと答えた。けれども、彼女の心のうちではまだ本当の答えがぶれたままだった。

「そうですか。……また、改めて答えを聞きましょう」

「アイリスまで何考えてんだよ！」

はっきりと通った、よく知っている少女の声が背後から聞こえる。
「セリシア……？」

アイリスが振り返ると、そこには息を切らした様子のセリシアが立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963i/>

烙印と光を探す虹

2011年9月5日03時30分発行